明治三十七年十二月十八日發行

(明治二十年十一月本會創立)

婦人衛生雜誌

第百八拾壹號

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
毎月一回二十日發行
内務省許可明治二十一年二月二十八日

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

第百八拾壹號 目次

明治三十八年

一月新年例會

來一月十四日第二土曜日午后正一時半より（晴雨共）例年の通り新年相互の禮を兼ね例會を神田區一ッ橋通女子職業學校に於て相開き候萬障御繰合せ御知友御誘引御來會有之度候也

餘興

一講談（戰爭實况談）松林伯鶴

明治三十七年十二月

大日本婦人衞生會

會員諸姉に告ぐ

日露兩國の交砲火を以て相鬪ゆるに至りてよりはやも十月あまりとはなりぬ。國運めでたくして戰はつねに我に利あれども其前途は尙はるかに遠し國をこぞつて共に力を致さむこと國民たるものゝつとめなれば國の爲め親をすて妻子をすてゝ進んで難にあたれる同胞の上を深く思ひやりて自らの力の及ぶかぎりはこれ等の人々の爲めに盡さむことはまだ多く言葉を要せざる處なり然りながら世界に數多からぬ強大國を敵として戰ふことにしあれば一と度戰ふ每に我同胞の傷き斃るゝものゝ甚だしきは萬を以て數ふるに至らんこれが爲め本國に送らるゝ傷病者がいだでになやみて呻吟するさまのいかばかりかなさけなかるべき本會もかねてこれ等の人々の爲め慰の一品たりとも送らばやと思ひ居たる折柄近頃日本赤十字社にては病者に尤も必要なる帽子の夥しく不足せるよしを聞きければ是を寄送することは誠に本會の相等しき事業と思ひ早速臨時會を開きて評議すべかりしも至急を要するの際已むなく役員會議にて種々評議の末本會非本會中より金貳百圓を出して同社へ寄附したり然りながら尙戰況の進むと共に傷病者も益々增加するてとなればこれ誠に九牛の一毛にも若かざるを覺ゆればひろくこれを會員諸姉にはかり一個たりとも多くこれが不足を補はむと欲してこゝに左の定めを設く希くは諸姉幸ひに多少の同情をよせられむ事を（つゞく）

一、本會の傷病者に對する帽子寄送は日本赤十字社本部とす

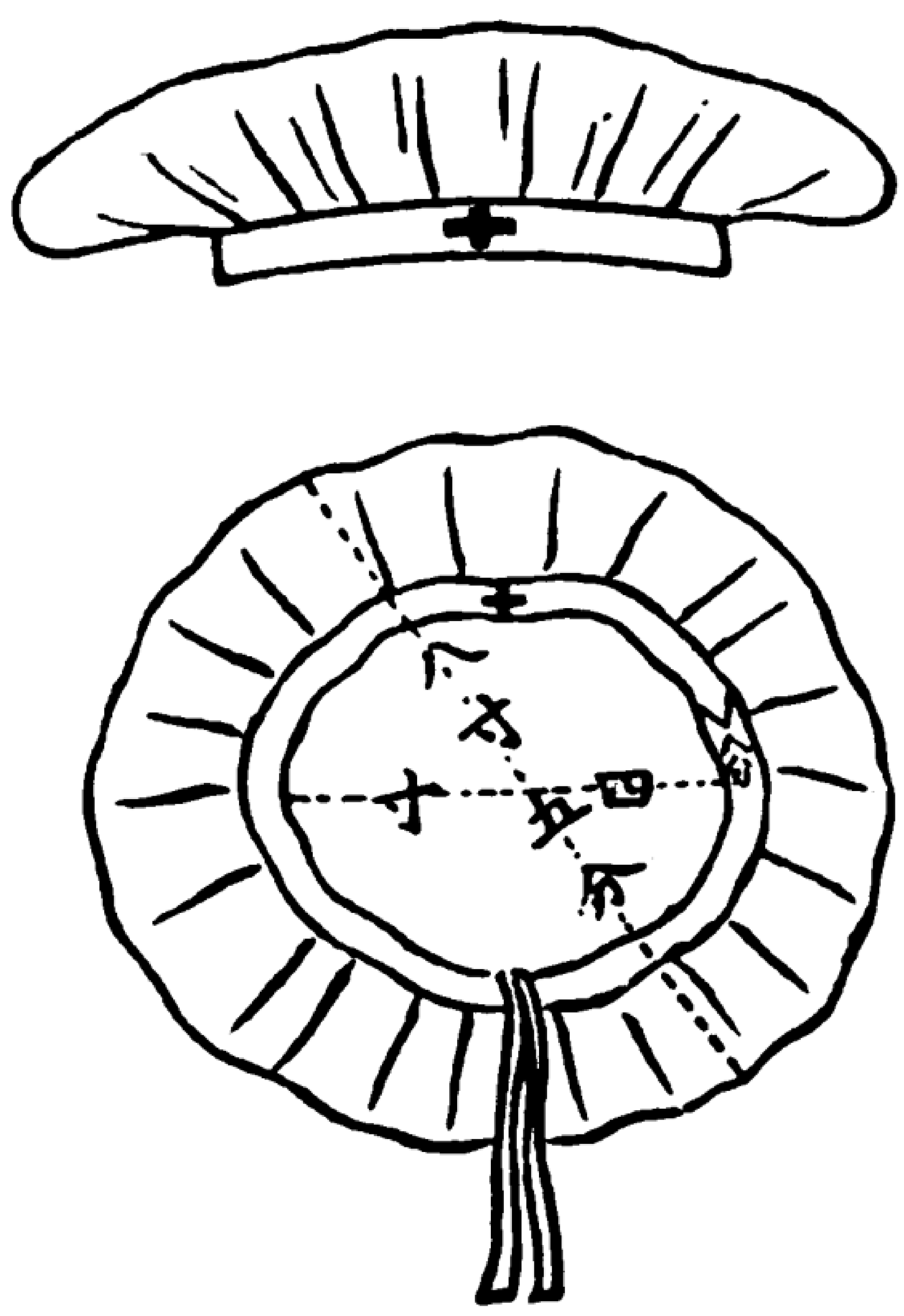
二、寄贈者は（現品、現金、）何れとも御隨意本會事務所（麴町區飯田町六町目三番地）迄御差出しあれば本會は直ちに之を取纏めて寄贈の運びをなす

三、寄贈の金品に對しては本會事務所より受領證を交附すべきも赤十字社よりの受領證は一と纏めにしたるものなれば一々交附せず

四、本會は戰爭終局まで此事業を繼續し何時にても多少に拘はらず其取扱を快諾す

五、寄送者諸姉の人名其他右に關する要用の件は本會雜誌を以て報告す

六、寄送の帽子は左の雛形により調製の事



調製代價は本フランチル綿フランチルの別により多少の相違はあれども凡廿錢以上卅五錢位なり

明治三十七年十一月

大日本婦人衛生會

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんを皆ともに希はざるはあらざれども其身健康にあらざれば此生活を得んをいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして吾等婦人のもつぱら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を惹かざるものゝ如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一同集會を開き學識經驗ある人々を招請して衛生上諸般の講義演說談話を聴き互に相研究し尙之を筆記して冊子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに施すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を叙べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其贊成をあふぐことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則

（明治廿二年十二月改正）

●第一章　目的

第一條　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を進捗する方法を講究し衛生上の智識を開發して以て社會全數の幸福を増進するにあり

●第二章　名稱位置

第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く

●第三章　會員

第三條　本會員たらんと欲する婦人は何人にても入會するを得

第四條　入會の際は姓名族籍住所及會員の紹介を明記し本會事務所に申込まるへし入會者には會員章を交付す[illegible]條末に詳なり入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるへし

第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす

第六條　男子にして本會の旨趣を賛成する者は之を賛成員とす其會錢は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に賛成員たることを望みたる者は役員の協議に依り無會費とすることあるへし

第七條　會員は本會に於て每月發刊する雜誌を無料にて受くることを得

第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親族知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せす

●第四章　役員

第九條　本會に評議員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の妃殿下に[illegible]ものとす

第十條　本會に左の役員を置く

會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名

第十一條　[illegible]會長幹事評議員は每年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の指名に依り會長之を命す但書記は本會員以外の婦人若くは男子に囑することあるへし

第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し[illegible]

（但役員[illegible]たるへきこと）

[illegible]を請求する者に就きても亦同じ

第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すへし

●第八章　雜誌

第三十條　本會は每月一回雜誌を發刊し每會に於ける衛生上諸講演演說談話等の雜記及内外藥報本會の諸報告等を掲け之を會員に配付すへし支會の報告あるとき又同じ

第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは書籍物品等を本會に寄附する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄贈者の姓名及品目を簿冊に登錄し倘

本會雜誌を以て報告すべし第卅二條 會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送付として別に返信料を添へらるべし(郵券は一錢切手)第卅三條 會費は東京府下に限り毎月領收人差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局(麴町飯田橋通郵便局)振出しあるべし第卅四條 會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若くは廣告することあるべし
第卅五條 本規則は會長の意見又は會員二十名以上の賛成に依り總會の決議を經るに非ざれば之を更正することを得ず

事務所 東京市麴町區飯田町六丁目三番地
私立大日本婦人衛生會

●役員姓名

總裁 東伏見宮依仁親王妃 周子殿下
會長 侯爵夫人 鍋島榮子
副會長 (いろは順) 濱尾作子
幹事 旭山作子
仝 羽川三絡子
仝 岡田德子
仝 高木かう子
仝 山本多興子
仝 松平芳子
仝 三浦粉子
評議員 伊集院しけ子
仝 石川貞子
仝 濱田捨子
仝 仁禮壽代子
仝 西丹子
仝 穂積獻子
仝 緒方悦子
仝 岡山とし子
仝 男爵夫人 加藤鈴子
仝 片山龜子
仝 子爵夫人 田中いよ子
仝 丹波貞子
仝 高橋孝子
仝 田村きよ子
仝 相馬陸子
仝 男爵夫人 南部隈子
仝 中濱芳子
仝 伯爵夫人 松平充子
仝 子爵夫人 松井正子
仝 子爵夫人 松平久子
仝 木場小ゆり子
仝 岸澄子
仝 三宅俊子
仝 宮本樂子
仝 宮下孩子

●支會 千葉、新潟、山形、宇都宮、茨城、高崎、米澤、

本會特別贊成員

(●は本會及支會に於て講演せられし諸氏)

醫學博士 ●入澤達吉君
理學博士 ●飯島魁君
ドクトル ●伊澤信小君
●色川閑上君
醫學士 ●伊東祐彦君
ドクトル ●飯盛挺造君
醫學博士 ●伊藤隼三君
理學博士 ●石川千代松君
[illegible] 岩井禎道君
醫學士 ●石原久君
貴族院議員 濱尾新君
醫學博士 ●濱田玄達君
法學博士 ●鳩山和夫君
東京 萩原瀬四郎君
醫學博士 ●芳賀榮二郎君
衛生局長 ●長谷川泰君
新潟 ●長谷川一詮君
小兒科 小原頼之君
醫學士 ●林春雄君
醫學士 ●佐藤達次郎君
醫學博士 ●緒方正規君

步兵中佐 醫學博士 醫學博士 醫學博士 醫學士 醫學博士 一等藥劑官 醫學士 男爵 ドクトル 醫學士 醫學博士 醫學博士 醫學士 醫學博士 醫學博士 ドクトル 醫學博士 ドクトル 醫學博士 法學博士 醫學博士 新潟 男爵 醫學士 醫學士 前醫科大學長 藥學博士 醫學士 藥學博士 醫學士 醫學士 醫學士 三等軍醫正 醫學士 一等軍醫

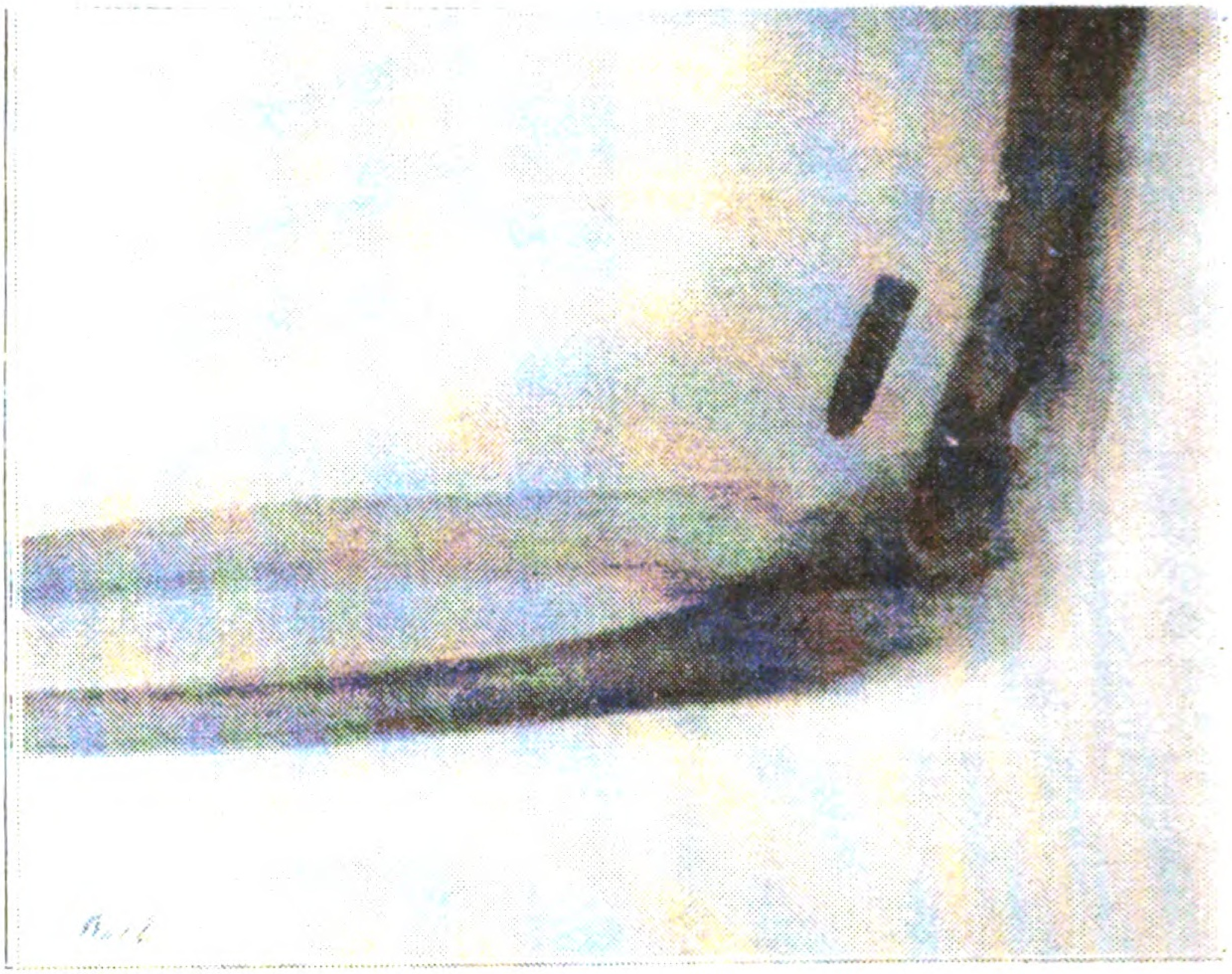
●堀内文次郎君 ●土肥慶藏君 ●岡田和一郎君 ●大澤謙二君 大西秀治君 ●大澤岳太郎君 ●恩田重信君 若杉喜三郎君 ●加藤弘之君 ●加藤照麿君 ●賀古鶴所君 ●河本重次郎君 ●片山國嘉君 川上[illegible]君 谷杉英光君 高山[illegible]君 ●高田[illegible]君 ●高木[illegible]君 ●高木[illegible]君 ●田代義德君 ●田代[illegible]君 ●高崎正風君 竹中成憲君 ●高山[illegible]君 ●高橋[illegible]君 ●丹波敬三君 ●高橋貞順君 ●田原良純君 ●田村光吉君 ●久保猪之吉君 米山彦郎君 ●星野篠光君 ●宮本叔君 ●橋井忠民君

大日本赤十字社長 理學博士 醫學博士 男爵 醫學博士 醫學博士 男爵 醫學博士 醫學士 陸軍軍醫監 醫學士 醫學博士 醫學博士 醫學博士 醫學博士 醫學士 醫學博士 醫學士 醫學博士 ドクトル ドクトル 學習院長 醫學博士 東京 帝國大學總長 東京帝國大學教授 醫學士 文部省書記官 前軍醫總監 ドクトル ドクトル 高崎醫會長 産科婦人科 ドクトル

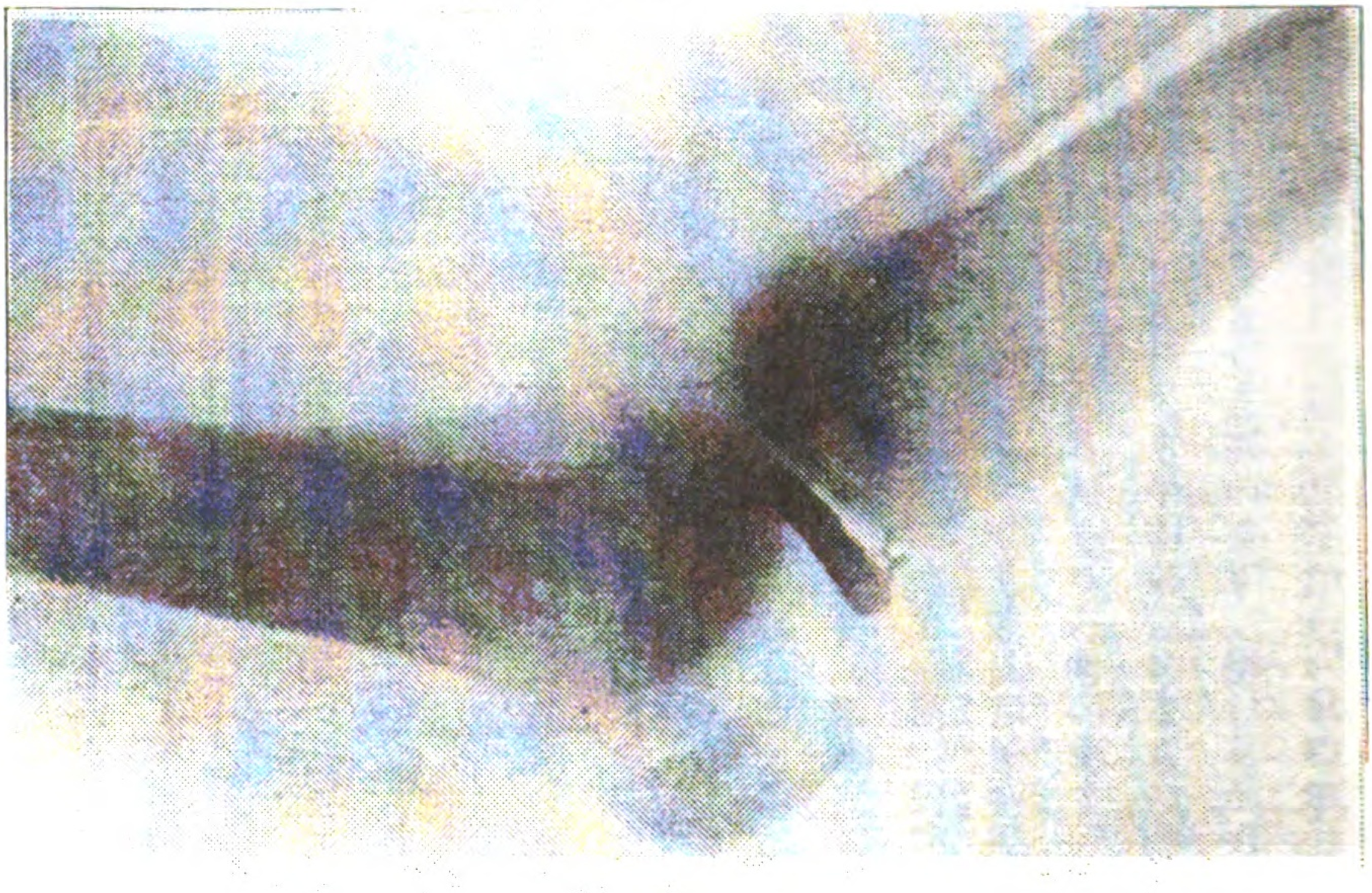
辻新次君 ●坪井正五郎君 ●長與稱吉君 ●南部[illegible]君 ●長井長義君 ●中濱東一郎君 ●小栗[illegible]君 ●村松[illegible]君 ●緒方[illegible]君 ●栗本東明君 ●山田[illegible]君 ●山田弘倫君 ●山根正次君 山川[illegible]君 ●丸茂[illegible]君 ●丸山[illegible]君 ●松山陽太郎君 北里柴三郎君 ●小西信八君 ●小[illegible]君 古川榮君 ●布施[illegible]君 ●後藤新平君 ●エ、ベルツ君 ●中野[illegible]君 ●寺田[illegible]君 ●秋元興朝君 ●足立寛君 ●新井[illegible]君 ●富士川游君 土谷[illegible]君 ●水原[illegible]君 ●久保田[illegible]君

醫學博士 醫學博士 醫學博士 高崎 ドクトル 醫學博士 醫學博士 醫學士 醫學博士 ドクトル 醫學博士 醫學士 醫學士 醫學博士 醫學博士 醫學士 醫學博士 醫學博士 醫學博士 小兒科專門 理學博士 醫學博士 醫學博士 伯爵 醫學士 醫學博士 ドクトル 醫學博士 醫學博士 醫學博士 醫學士 醫學博士 醫學士

●佐々木政吉君 ●淺田政次君 ●朝倉文三君 ●朝山[illegible]君 秋田聰太郎君 ●佐藤[illegible]三郎君 櫻井郁二郎君 ●佐藤恒久君 佐伯理一郎君 ●紳[illegible]君 ●榊順次郎君 櫻井保[illegible]君 ●桐淵[illegible]君 ●北村[illegible]君 ●北川乙二郎君 ●木下正中君 ●北島[illegible]君 ●北里柴三郎君 ●三浦[illegible]君 三浦謹之助君 ●宮入[illegible]君 ●鈴木[illegible]君 ●三島通良君 ●三宅秀君 ●三輪信太郎君 ●土方久元君 ●島村[illegible]君 ●弘田長君 ●須田[illegible]君 ●ミス、ヒユーズ君 ●森林太郎君 ●石川三男三君 ●波多野[illegible]君 ●吳秀三君 ●榊[illegible]雄一君



露兵の使用せる彈丸
X光線により撮影



仝上

名家演壇

戰地に於ける見聞

醫學博士 一等軍醫正　能勢靜太君演說
伽速記事務所員速記

皆さま今日は過日三浦大學教授の奥様より戰地に行つて來たのであるから戰地の話をしたらどうだと云ふ御依賴でございまして快く御請け致しました、所が段々考へて見まするど私のやうな訥辯な者が戰地のことを御話しても一向面白くないであらうとは思ひましてございますが、時節柄折角の御依賴でありますから不肖を顧みず御話を致すことに致します、それで戰地に於ける軍隊の困難辛苦、其他士官兵卒の逸事などのことは各通信員新聞記者が皆さんに詳しく御紹介して居りますから、私の申上げることはない位のことでございます、併しながら皆さんが新聞を御覽になつても平素御覽にならぬ種々の衛生部内のことが澤山あるだらうと考へます、例へて見まするど病院の如きものでも或は豫備病院と云ふこともあれば兵站病院、戰時定立病院、野戰病院等種々の名がございます、是等に付ては未だ皆さんが能く御分りにならぬことがあるだらうと思ひますので私は今日陸軍の衛生機關、衛生部の組織、それを御話致したいと思ひます、第二に自分が戰地へ參りまして見聞致しました所の一部を御話しやうと云ふ考へでございます。

それで先づ第一に吾々の衛生部の機關はどう云ふものであるかと云ふと、平時に於ては一番上にありて總轄して居る所のものは醫務局である、それは陸軍省にあつて局長もあれば課長もあり下は種々に分れて居る、其下にはどう云ふものがあるかと云ふと御承知の通り全國に十二師團ございまして其一個師

團に各師團軍醫部と云ふものがあつて是も種々に分れて居ります、それには軍醫部長と云ふものがある、近衛を入れると十三師團でありますが近衛にも軍醫部があつてそれは近衛師團全體の衛生部を總括して居る、それから一師團の中にどう云ふものがあるかと云ふと平時には衛戍病院と云ものがある、東京では近衛と第一師團と合して昨年までは一つでありましたが本年からは第二を拵へて衛戍病院が二つになつた、それから師團の中には要塞と云ふものが含んで居る、横須賀要塞は第一師團に含んで居る、それには要塞の衛戍病院がある、其他に各隊例へば歩兵隊砲兵隊に隊附の軍醫が居る、それで師團の中には東京で御話しますと、東京に大きな衛戍病院があつて分營の高崎佐倉にも衛戍病院がある、平時は是だけでありますが、戰時には是が變つて大本營が設けられると共に醫務局が野戰衛生長官部と云ふものになる、醫務局長が野戰衛生長官になり、若しも大本營を東京以外に置かれた時は留守の醫務局長かできて前の醫務局長は野戰衛生長官になる、それから戰時は御承知の通り軍と云ふものが出來て、此軍は今日では幾つの師團を集めたものを軍と云ふ確かな極りはありませぬが今日の有樣では先づ二箇師團か三箇師團を合したものが軍である、其軍には軍の軍醫部と云ふものがあつて其下に師團の軍醫部と云ふものがある、詰り醫務局と師團の間に軍と云ふものが這入る、それから師團の軍醫部の中に平時では衛戍病院と云ふのが戰時になると是が無くなつて豫備病院になる、それから師團には野戰病院と衛生隊と隊附軍醫と是だけが附いて居る、野戰病院や衛生隊は戰時でなければ出來ない、一つの師團には野戰病院が六つと衛生隊が一つ是だけ附いて居る、是だけは戰に出る方でありますが其後につゞくのが兵站部である、其兵站部にも軍醫部軍醫部長と云ふものがある、例へて見ると今旅順の方へ行つて居るのが第○軍でそれには第○軍の兵站監部と云ふものがあつて兵站軍醫部が附いて居る、兵站部ではどう云ふ

ことをするかと云ふと、戰線即ち前方に患者が出來るとそれを後方に運ぶ任務でございます兵站部の內には衞生豫備員衞生豫備廠患者輸送部など丶云ふものが屬しております、衞生豫備廠と云ふのは總ての衞生材料藥品等を有して居り、野戰病院衞生隊、益々諸隊と必用なる衞生材料を補給するのであります、患者輸送部は文字の如く前に患者が出來ればそれを後方に送る機關である、それに若干の軍醫士官も附いて居る、それから衞生豫備員と云ふのは野戰病院が戰鬪に加はつて治療をするのであるが永く其處に止ることが出來ない、軍が進むに從つて進まなければならぬゆゑ野戰病院に於て治療した患者を衞生豫備員が引受け玆に病院を設くる此を戰時定立病院と云ふのであります、平時の衞戍病院が閉られて戰時の豫備病院となるときは經濟も元より臨時費も支辨となるので御ざいます、さて今日の日本と露西亞の戰爭に付て申しますと內地の宇品を出てダルニーに行く間には病院船が通つて居り、船から上ると兵站の部分で兵站地になり、それから先きが戰線と云ふ樣に區分いたします、そこで敵と戰つて傷者が出來ますと何が一番最初に手當をするかと云ふと、各隊には隊附の一等軍醫以下看護長看護手等の衞生部員が附いて居る、それが戰爭をして居る後ろに假繃帶所を拵へて負傷した者を連れて來て軍醫が繃帶をする、此隊附の軍醫は戰鬪を交へて居る者と同じ運動をするものであります、さうして一時の處置をする、戰爭が始まりますと其後に衞生隊と云ふものが師團の命令で開かれる、其衞生隊には軍醫と患者を運ぶ步兵から出來た擔架卒と云ふものがある、それが一箇師團に二中隊あつて戰鬪が開けて傷者が出來たと云ふ報知があると彈丸の來ない一千米突か二千米突位離れた所に衞生隊の作業所を開いて何時患者が來ても治療の出來るやうに準備をして居る、傷者が出來ると擔架卒が其處へ運んで來る、それて衞生隊では出來るだけの療治をして及ぶだけ速に後方に開設してをる野戰病院に傷者を後送す

然らざれば時々野戰病院が衞生隊の作業していた地點まで進み傷者を引き受るとあり、一箇の野戰病院で足らぬときは二三所は四箇と多數の病院を開くのであります、野戰病院では十分に治療をし、其中に軍隊が進むと從つて是も一緒に進まなければならぬ、其時分には前に御話した衞生豫備員と云ふものが出て來る、それが野戰病院の患者を引受ける仕組です患者輸送部と云ふものは野戰病院の傷者又は戰時定立病院の傷者を後方に輸送す、後方兵站部の區域内には兵站病院あり此處に前方より後送の傷病者を收容す、今日で申しますと遼陽から傷者を送るには澤山の兵站病院を通過しなければなりませぬのて戰線が長くなればなる程此兵站病院の數が多くならなければならぬ、それが澤山出來て段々後方に送つて上陸地には大きな兵站病院があつて、其處で相當の治療を受けて病院船に移し内地に航送し内地に着すると内地に開設の豫備病院に入院するのです、是等の病院は成べく傷病者を早く治療して戰地よりは日本に内地の病院では隊に歸えすことに務めて居る、是で先づ普通一般のことは御分りでございませうが、其他に舍營病院と云ふ名が新聞などにも書いてありますが、今日遼陽あたりでは盛に戰爭をして居りませぬから一地に留つて居る部隊が澤山ある、さうすると休んで居ると病人が澤山出來る、それを野戰病院で治療しなければならぬのでありますが、元來野戰病院は負傷者を治療する所で平病者は治療しない、たてまいであるしかし軍隊に病者ができれば此を治療する場所の入用であるからそこで野戰病院が一つの病院を開いて是等の病人を受ける、それを舍營病院と云ふのであります、患者療養所と云ふのは舍營病院と同じやうな施設であるが併ながら是は軍隊が前へ進む道すがら種々な内科病者が出來ますから途中に留めなければならぬ、其時に野戰病院なり兵站病院の方で療養所を拵へるのでありります、先づ簡單に御話しますと斯う云ふ風で、戰時には衞生隊野戰病院、舍營病院衞生豫備廠、兵

站病院、豫備病院など丶云ふ名稱のものが編成されるのでありまする。

私は名古屋の第三師團に居りまして、同師團の野戰病院に附いて戰地へ參りました、恰度四月でございましたが、東京などは大都會でございまして、軍人が何處に居るか分らぬ、位軍隊が出征するにも何處から出發するか分らぬ有樣である、それが東京の東京たる所以でありますが、歡迎とか歡迎とか云ふやうなことも地方と比べると頗る趣きが違ひます、其土地の歡迎送の有樣はどんなものであつたかと云ふことを御話したら地方の樣子が御分りにならうと思ひます、御承知の通り動員が下つて各隊が出征して往く、それが皆東海道を通過して行つたのですが、其當時名古屋邊りでは餘程歡迎をして居る積りでございますが、先きに出征した者から聞きますと名古屋の歡送迎と云ふものは實に冷淡些細なもので一向盛んでない、斯う云ふやうな手紙を貰つて居つた、併ながら自分達が見るとナカ／＼さうでなからうと思つて居りましたが、實際に自分が行つて見ると前の人の言つた通りて、名古屋の歡送迎と云ふものはマダ／＼及ばぬのであつた、其時分の歡送迎は今日とは餘程異なつて居るやうでございますが、實に盛んなもので殆ど吾々が名古屋を出ましてそれから京、大阪、を經、廣島に參りましたが、名古屋を出て岐阜縣へ這入りますと軌道の兩側は御承知の通り村落の在る所もあり、又無い所もある、所が其村落の在る所は無論、無い所にしても各近傍の村落から必ず旗を立て、提灯を持つて出るとか、總て農民が殆ど間然する所のないやうに出て居る、それから汽車の通る沿道では皆萬歲を唱へて居る、それが色々な有樣で農家の者でありますから農事をして居つて鍬を片手に持つて初めて汽車の來たのに氣が付いて、手を揚げて萬歲を唱へる、肥桶を擔いで居る者が片方の手を放すことは出來ませぬから、片手を揚げて是れも萬歲を唱へて居るのである、それから脊に負はれて居る三四歲位の者が手を揚げて居りま

すがそれも萬歳を唱へて居るのである、兎に角手を揚げた者は皆萬歳を唱へて居るので、遙か遠方の家を見ると皆手を擧げて居る、此等の萬歳の聲は聞きとれぬが手をあげておるものは必ず口に萬歳を唱えておるのです、人力車を輓いて歩きながら片方で車夫が萬歳を唱へる、殆ど汽車の見える限りの人は皆萬歳を唱へる、聲は聞えぬが皆手を擧げて居る、小さな小供、伜に負はれて居る小供から老人は無論のこと、何でも汽車さへ見れば萬歳を唱へる、殊に吾く々が岐阜に參りますると、或所で百姓が農事をやつて居ります、所が直ぐに座つて頻りに手を突いてお辭儀をする何だらうかと思つて居りますと、汽車の通るうちやつて居りますから、初めて我々も氣がつきこれは萬歳の代りものに相違ないと言つて話したことでございます、途中は殆ど萬歳の聲で眠られぬ程であつた、さうして各ステーションは無論、途中に於て最も感じたのは小さな小供が五六歳位から十二三歳位まで、男も女も混つて岐阜縣邊りては赤い鉢卷をして太鼓を叩いて汽車の通るうち唱歌を謠つて歡送をして居る、それから私共の參つた汽車は恰度前原で二時間ばかり休んだ、所が御承知の通り小さな所で二時間休むのには無聊に苦しむ程である、それが爲に土地の人が五六人の令孃を連れて來て、吾々の休んで居る所で二時間の間絶間なく唱歌を謠つて、さうして吾々を慰めて下すつた、汽車が將に出やうとすると、極く小さな小供五つ六つ七つ八つ位な小供が揃つて軍歌を歌ふナカ〱賴んでも出來ぬ話で一生懸命であるから汗を流して汽車の出るまでやつて居た、此兒達は眞面目に我々出征者を慰め無上の感に落涙したよで御座います、如斯かん動を起したは全く地方人士の誠心誠意熱心なる歡迎に由るので出征者は異口同音最早死すとも憾みずと云つておりました、大津邊へ行くと夜遅く着きましてもステーションの中は歡迎者で一ぱいになつて居る、さうして前の通り太鼓を叩いて軍歌を歌う、京都大阪は最も盛んて、京都へ參りましては東本願寺

或は西本願寺御名代又は同婦人會華族總代など種々の旗が立つて　ゐて貴婦人方僧侶皆御出張にて汽車が着くと何々伯爵夫人何會總代とか華族總代某と一々車中に御挨拶に來たられ汽車の停止中全く御應答に忙わしき程で、色々な贈物があり、花を贈られ守札は山を爲す位溜つたのです、大阪も其通り、神戸へ參りましたのが丁度夜中の二時半でございましたが、何方も御出でがあるまいと思つた所が何ぞはからん盛んに女學校の團體とか、貴婦人會の團體とか言ふのが出て來て色々な斡旋をされて茶を戴くやら唱歌を歌つて戴くやら大變盛んなことであつた、そこで吾々の部下の者が言つて居るのを聞くと、どうも斯う歡迎された日には死なずに歸つては來られぬと云ふやうなことを言つて居る、吾々もさう思ひました、小さな小供に歡迎されたりすると遊んでは來られぬと云ふ觀念を起す有樣であります、さう云ふことが東京邊りでは殆ど御覽になることが出來ないと思ふ、夜になると松明を燈し、提灯を燈し、實に盛んである、それでありますから出て行く者が何か仕事をしなければ歸られぬと云ふやうな心持になるのです。

それから少し話が變りますが、今度は廣島に參りまして、廣島から宇品に向ひ戰地に向つたのでありますが、宇品に行くと初めて成程大戰爭であるなど云ふ觀念を起しました、愈々戰地へ參りましたが支那の南部の方は承知しませぬが、北部の遼東半島盛京省の有樣はどんなであるかと云ふことを御話したら宜からうかと思ふ、滿洲は南の方が(圖を示す)金州でございまして、旅順が此邊に在ると云ふ譯である、それで此方は大孤山が在つて此處が安東縣である、此盛京省は南に行くに從つて土地が惡い、北はナカ〳〵地味が良くて、金州近くは最も土地が惡い、此大孤山の邊も地味が惡い爲に樹木は少ない、從つて家も粗末で、此邊に行くと樹木が楊柳が在るだけでございます、日本に在る柳でない楊と云ふ柳で葉の大きな隨分木も大きい、其木か幾らか在る、そこで

此楊柳の在る所は人家が屹度ある、楊柳の外が必ず村落と一緒になつて居る、其間は日本で言ふ森とか林とか云ふやうなものは殆ど無いと言つても宜いですゝ家の造り方はどんなかと云ふと、極く材木に乏しい所でありますから農家の家になりますと、多くは天然石の丸石を粗末に積んでさうして、四角な箱の樣なものを拵へる、其上に幾分かの材木を置いて、それへあんぺらを掛けます、此も日本のやうな上等なものではない、極く粗末なもので長さ一間半位で幅四五尺位なものである、それを材木の上へ掛けて上へ泥を載せる、それですから雨が降ると漏る、天氣になると又泥を載せる、極く簡單なものである、村落へ這入ると斯う云ふ家の建てられたのが澤山あります、金州近傍の人家は大概斯う云ふ風な有樣ですが、城内に這入ると流石城内でありますから立派な家がありますが、近邊の農家は皆さうであります、然るに段々鳳凰城の方へ行くとか蓋平とか海城の方になりまするとと段々家が立派になつて其樣な家は見ないやうであります、幾らか違つて居ります、金州邊では大きな家は少しもないが極く粗末な家ばかりであります、それから畑に在る物を申しますると高粱など丈が極く低い、吾々の丈位はないやうであります、北の方へ参りまして熊岳城から蓋平海城の方へ参ると馬に乗つても頭が見えぬ位であります、餘程地味が違ひます、北へ行く程地味が違ひますから人民の貧富の度も大變違ふやうである、それで山も海岸の方の山は旅順近傍には大きな山もありますが大概は小さな饅頭を並べたやうな山で大きなものはありませぬ、北へ行く程立派な山があります、それも日本のやうな立派な森林と云ふやうなものはありませぬが、柳の外に松も在る、其他變つた木があります、それから道路でございますが、道路は殆ど自然の道で人工を加へて拵へたものはない、金州から西の大孤山を經て安東縣へ行く、日本で言ふと東海道のやうな立派な道路の譯でありますが、それも決して想像するやうな譯でなく、幅は幾らも

廣いのがありますが、畑と道の差別がありませぬ、畑の中を通つても何とも言はない、御承知の通り大きな廣い畑でありますから少し位踏んで歩いても支那人は無頓着で人間が通り馬が通つた跡が道になるのであります、それで軍隊が通ると何時も立派な道路が出來る何萬と云ふ兵隊に牛も馬も車も通りますから立派な道路になる、それで軍隊の通つた後は一目見ると分ります、一體に支那の道路はさう云ふ風で、河の中に橋がありませぬから大概河の中を歩いて通る、其河の有樣も餘程違ひますので、私が以前日清戰爭の時に朝鮮から參りまして鳳凰城から彼の道路を通つて歸途に大孤山から金州へ出て大連灣から歸りましたが、是れだけ參つた中に橋と云ふものが幾つございましたらうか一つか二つ位のものでありませう、それも近來漸々出來たやうな有樣です、殆ど橋はありませぬ、それから氷のない時、春夏は皆ザブ〳〵這入つて通る、それで雨が降ると丸で通れませぬ、斯う云ふ風ですから支那人は大きな物を運搬するのは大抵冬になつて運ぶ、冬になると河が凍りましてどんな重い物を持つて通つても平氣である、其時期に總ての物を運搬して居ります、今度あたりも總ての道路に橋が無いから皆徒踄をする夏の間の徒踄は障りがありませぬが、是から少し凍り始まると徒踄が一番怖いのです、何故かと云ふと徒踄をして足が濡る、さうすると凍傷になる、骨も身も腐るから是から先きの徒踄が一番怖ろしいのですが戰爭をするのでありますから道を撰んで通るの河をさけて往くなとゝ云ふことはできず戰況によりては凍傷の恐るべきは知りつゝも河をかち渡りせねばなりませぬ是が一番困難であります、支那では日本と異つて大農的の耕作をやりますから馬牛を使はなければならぬ、從つて物を運搬するにも遠方に運ぶのでありますから支那車輛を曳かせるために馬牛を大切にする、大切にすると共に之を使ふことが上手でございまして、總て馬牛を使ふには御承知でもございませうが口で命令をして鞭で打つやうなことは

ない、多くは一つの車を三頭四頭位に曳かせますが、中には馬も入れば牛も入れると云ふやうにして混ぜて使ふのもあり馬だけ揃へて使ふのもありますが、車を曳かす時に一様に鞭を持つて居つて口で言ふ、右ならウーとかリーとか云ふと揃つて右へ行く、聲の掛けやうで左へも行けば後ろへも行く實に自由なものである、それでありますから道の悪い時には自分は山の上へ登つて山の上を歩るく、さうして馬だけは下の道を通らして山の上から號令を掛けて居る、さうすると自由に動く、實に奇態である、それは何故かと云ふに可愛がるのと使ひ方が上手なからである、牛馬の子が出來ると子が後ろへ附いて歩く、其子が一緒になつて歩く中に段々馴れて仕舞ふ子は親の乳を飲んでは後から附いて歩く實に仲の好いものである、食物をやる時は馬も牛も離して仕舞つて斯んな四角な箱へ食物を入れると馬も牛も頭を突込んで食つて居る、それで日本から持つて參つた馬は使ひやうもはげしいために痩せて氣の毒な有様でありますが、支那の馬は實に肥つて居りまして今日では支那車輛がなくては日本の物は運べぬ位でありますが、どう云ふ風にして使ふかと思つて見て居ると朝から晩まで使つて汗もかゝさない、實に奇態でありますが其代り食物を與へるときがくると此を終らなければ何んなことをしても動かない、それから此支那車輛と云ふのは日本のと違つてどんな所でも行くのであります、どんな坂でも危い所でも行く、例を引くと私共歸ります時に此車輛へ乘りましたが、どんな斜面の急な坂でも道でも歩きます、或時などは雨が降つて川が通れなかつたすると其側に鐵道の橋があつたのを渡らうとしたが此鐵道の橋は往來より遙か高く且つ之に昇るべき道はなかつたのです鐵路も頗る高い土手の上で到底此に上るとは思ひも寄らなかた然るに此斜面の急な土手に種々苦心しヤツト車を曳き上げさした車は昇つたが軌道があつてレールの間に車を入れるとができず此レールを越さんと種々馬にむちうち遂に車輛は 橋上

に到つた所が鐵道の橋は軌道があつて間が隙いて居る其中へ馬が足を落して倒れた、支那の馬は斯う云ふ時になると少しも暴れない、日本の馬なればガタく暴れて足を折るがジッとして居つて主人が來て足を上げて呉れるまで待つて居る、軈て足を上げてやると元のやうに車を挽いて歩いて往た實によく慣らしたものでありますロの悪い人が云ふにはあれだけ支那人は下等だ下等だから動物と親密であるとソレハ兎も角も支那人の牛馬を使役するにたくみなのには皆一驚を喫しております、今度の戰爭には日本人は支那人を害さないと云ふことが分つて居りますので逃出す者もありませぬのでしたが、此前の日清の役などには日本軍を見ると自分の家の御祖父さん御祖母さん位は措いても動物をば必ず連れて逃げる、かく迄に動物を大切にするそれでも吾々が食ふ物がない時には何かありはすまいかと思つて這入つて見ると家に居るのは婆さんか爺さん、爺さんの方は逃げるが支那の婦人は足が弱いと云ふやうな關係から大概婆さんの方が多く家におきざりになつておりました、さう云ふ時には動物だけは連れて逃げる、是は支那人に取つて唯一の財産であると思ふ、是がないと支那人は何も働くことが出來ないと云つてもヨイ位だから保護する道理です、今度の戰爭はまるて内地で戰爭するのと同じでありますから動物もかくさず日本軍隊に妨害も與へず至極都合が宜い、兎に角動物を使ふことは上手であつて又大變可愛がるのであります。○

是から少し私が上陸しまして見聞したことを御話しやうと思ひますが、上陸しますと直ぐに金州まで急行しろと云ふことで金州へ參りまして、それから敵の狀况に依つて再び上陸地近傍に歸りまして鐵道線路を傳ふて得利寺熊岳城、蓋平大石橋、海城迄參り是より南北瓦房店普蘭店金州大連灣ダルニーを經て歸還いたしました其間に見聞しましたことを御話しますが、今日日本から出て居る兵卒將校士官がどんなものを持つてどう云ふ風なことをやつて居るか

と云ふことを御話しやうと思ふ、御承知の通り兵は夏であると夏服を着て背嚢に新しき靴外套是に毛布をも一緒にせおつておるともある、或場合は外套だけを背負つて其他に種々靴を掃除するものであるとか頭を搔く物とかを背嚢の中へ入れて尚ほ歩兵なら歩兵に必要な銃劍を持つて行軍するのであります、其他に携帶行糧と稱するもの、是は軍隊の言葉で御分りにならぬか知れませぬが、早く言へば辨當のやうなもので、場合に依つて二日分又は三日分、戰況に應じ必要だけ持たせるのであります、それはどう云ふ場合に入用かと云ふと、戰爭をやつて居るのでありますから平時の如く自由に炊事をするとができません戰爭をヤツテおらぬときは隊の内で兵卒が煮たきをして少しも不自由はありませぬが何分戰闘をしておる場合にはさう云ふ譯にはいきませぬから炊事をする暇のない止むを得ぬ時に此携帶行糧を食べる此携帶行糧と云ふものは種々なものを以て拵へるのでありますが、どう云ふものが宜いかと云ふと量が少くて滋養分の多いさうして安くなければならぬと云ふやうな物で、中には麵麭もあれば世界各國皆違つて居つて研究されつゝあります、それから士官になりますと、大尉以下の者は將校行李と申しまして幅一尺餘り長さ二尺五寸位の一定の鞄がある、それを一つ持つことが出來る、併ながら重量と云ふものが極つて居る、其重量より多くてはならぬと云ふことでありますから、其中に自分の外套を入れるとか總て戰地で必要なものだけを入れて、持つて居る、少佐から大佐までは其箱を二つ持つことが出來る、將官は三つである、何故さう云ふ風に入れ物に極りを付けて置くかと云ふに、一つの隊が參りますと兵は各自分で荷物を持つて居りますが、二百人なら二百人の兵の食事をする道具もありますし、兵が二日なり三日なり食べる食料も持つて行かなければならぬ、それと今の士官の鞄などを持つて行くのでありますす、此を運ぶに車幾輛馬何匹と極つて居りますから、それで各極りを付けて何貫目以上持つて

とは出來ぬと云ふことになつて居る、それて御承知の通り今度の戰爭では柿色の着物でございましてそれも一枚より有つて居らない、自分が荷物を持たなければなりませぬから若し重くなると自由に運動が出來ない、是非輕くしないとならぬので多くは襯衣一枚とズボン下を餘計持つて居る位である、夏はそれて宜しいが冬になると澤山持たなければならぬから餘程困難である、澤山持つと運動が出來ないと云ふことになる、是からは最も困る時代でありまして、其上今度は前の戰爭よりズッと北へ進んで居りますから寒さも强うございます、ちよつと考へると緯度が同じの處は歐羅巴あたりの寒さと同じである如く思はれますが、なか〳〵想像に及ばぬ程嚴しく感じます、普通の着物即ち人工で造た物は寒くてならぬ、外から刺されるやうな氣持て風が通る、デありますから支那でも露西亞でも皆毛皮の衣服が必要でありまして皮着物を着て居る日本でもさう云ふことは萬々やりたいのでございますが、なか〳〵今日の所さう云ふ譯に行くまいと思ひます、私は今度の冬は知りませぬが、此前參つた時のことを御話すると嘘のやうなことがある、例を話しますと兵が歩哨に立つて居る時にジッとして居ると靴が地面に附着いて仕舞ふから始終足踏をして運動して居ります、隨分疲勞するでせうがさうしないと靴が地上に凍りつき持上らなくなる、それから兵士が行軍をして晝飯の時に休む、其時に何だかカチ〳〵音をさせるから何をするかと思ふと、休んで居つて銃の木の所を持つて筒先を齒へ當てますと齒が附着く、それを離しますからパチ〳〵音がする、兵士が多勢で遊事にして居る、それから喇叭を吹きますに舌が金に附着して舌の皮を剝ぐと云ふ有樣である、或時私は鳳凰城から五里ばかり離れた所に居りましたが敵が來ると云ふ噂があるので砲兵陣地を敷きましたが、其時に砲を持つて砲さうとしたら其兵の手の皮が砲の金屬の部に附着いて仕舞つて遂に手の上皮を剝ぎました平素は、乾いて居るやうでありますが活きて居り

ますからどうしても濕りがあるから直ぐ氷付く、それから吾々が支那人の家に舍營して居りまして夜は火を焚き、夜中に外に用達に出やうと思つて金の把手を持つと手が附着つく、何か汚ない物でもありはしないかと思つて見ると何にもない、どう云ふものかと思つて考へると自分の手に濕りがあるので氷付くのであつた、戸の外へ出て空氣に當ると鼻の中が痛い、どう云ふものかと思ふと鼻毛が鼻の中で互に氷付くので呼吸をして鼻が開く度毎に痛を覺へる、亦寒氣の強きとき殊に夜中戸外に出ると目が恰も眼病のとき目やにのでる時の樣な感じがする結膜炎にてもなつたのかと疑ひ部屋の内に入るとすぐ直をるしかし又戸外に出ると又惡い、それはどうしてかと思ふと呼吸をした時に睫毛に呼吸が附着つく、それが氷着いて眼を開いたり閉ぢたりする時に工合が惡い、ちよつと噓らしいのでありますが實際に私が經驗したのであります、行軍をする時に互に顏が同じやうである、誰も彼も睫毛も口ひげも眞白で白くなると顏の差別が出來ない、君は誰かと云つて尋ねるやうな譯である、さう云ふ寒さでありますから頭巾を被り外套を着て二つでも三つでも有りたけ手袋をさして參りますが、頭巾の上で前頭部と兩方の耳の所に眞白に氷がつく、それは皆呼吸が外へ出て凍るのでありますが恰度雪が積つたやうになります、斯う云ふ面白いことが澤山あつて、まるで人の顏などは見別けが付かぬのであります、其中で一番困難なのは辨當である、吾々が行軍する時に長い途であるから飯を炊いて貰つて握飯を拵へて出る、握飯を食べやうと云ふ時に、日本などで飯が氷ると云ふのは花が咲くやうになついてあるが、アチラのは雪を一生懸命堅く握つたやうになつてなか〳〵溶けない、仕方がないからたき火の中へ投込んで置くとジージーと云つて上は溶けるが中は依然凍つて食べられぬ、今度も冬になると兵の携帯食は非常に困難なるだらうと思ひます、さうかと云つて麵麭を食べやうとしても飲ものが少いゆゑ咽喉へ這入にくひ、是が

一番の困難で、それから夏から初秋の間は川があれば水を浴びて身體を奇麗にするともできるが冬はさういかない、第一風呂と云ふものがないのでありますから、尤も金州とか鳳凰城とか云ふ都には錢湯のやうなもゝが一つ位ありますが其の他には何にもない、それで風呂を沸かす所ではありませぬから、仕方なしに兵士の食物を拵へる湯の材料を節して風呂を拵へる、それには支那に澤山ある大きな瓶を持つて來て其中に湯を入れるのである、デあるから餘程急いで這入らぬとつめたくなる、所が吾々一緒に參りました時には先輩の者に身體の大きな者があつて其人が先きに這入るとかめだから度々底を拔いて仕舞つて困つたことがありますが、今度あたりも大變弱つて居ると思いますそれから食物でございます、食物はどう云ふものを食つて居るかと云ふと、上司令官から兵士まで同じ食物を給與される、吾々の參つて居ります時分には副食物として頂いたものは何かと云ふと大和煮と云ふ牛肉の鑵詰と福神漬と鮭の鑵詰と此三類でございました、偶に大和煮を食べたら旨からうし鮭の鑵詰も旨いが朝から晩まで食ふのであるから倦きる、朝福神漬で晝が鮭と云ふ風になると宜いのですがさう云ふ譯にいきませぬから朝から晩まで鮭ばかり貰ふこともあり毎日福神漬を給されるともあるそれも段々軍が進むに從つて兵站部で食物を送るに困難でありますから吾々の歸る時などは當り前の量の半分位しか貰へない、又福神漬も池の端仲町の福神漬なら、美味いが地方で拵へる極く不味いもの其一鑵を十六人二度に食べると云ふやうなこともありました今日は鹽鮭の御馳走だと云つて悦んで居ると一人が此の位(一寸四方)しかない是では食べられぬと云つて話したこともありましたが、前に行く程食物の缺乏を來します、今度あたりは兵站の送る手管が餘程宜くなつて居りますが、何分軍隊が大きうございますから十分な譯にいかない。

それから露營です、小さな部隊であると進んで行く間に村落がありますから今日はどの村へ泊れと云ふ

指揮があつて泊ることが出來ますが、大きな部隊になるとさうはいけませぬ、多勢の兵士を家に入れることが出來ませぬから露營をする、其時はどうするかと云ふと近傍の木の枝を折るとか草を取つて敷くとかして各自は此位な天幕を持つて居りますから、それを掛け亦は張つて寢る、或は二三人組んでつなぎ合せ其下に寢る、斯う云ふ風である、夏はそれでも宜しいが是から先きになると餘程困難すると思ひます、戰線近くなると何の村此の村と撰ぶ譯にいかない戰爭するに必要な所へ泊まらなければなりませぬから餘程苦しいことになります、それから露營をする、即ち天幕を張つて幾人かの人間が一緒になつて寢るのでありますが、露西亞の方には天幕の研究をして居つて、平素都を出て山の中へ行つて夏中天幕住ひをして大きなのを澤山持つて居りますが、日本ではさうはいかない、多くは銘々持つて居る小さなのでやつて居る、中で幸ひなのは舍營であつて、お前の病院は何村へ行つて居れと言はれると其村へ行つて泊らなければならぬ、其時に民家に行つてお前の家を幾間貸して呉れと頼む、若し承知しないときは家族のはいられる位部屋を與へ其他の部分使ふからお前方は其方へ行けと云つて泊る、今度は支那人が餘程歡迎して呉れますから喜んで借す者もありますが女子供のある家は迷惑なことだらうと思ふ、それで戰になりますと誰も彼も一緒でございまして軍司令官大將とか中將とか云ふ人も兵卒と同じ事で隨分氣の毒なやうな所へ寢むのでありますが支那の家は斯う云ふ風になつて居りまして（圖解）家にはいると左右に部屋があり其室の兩側又は片側か土地臺より凡三尺位も高く來つており此內を煮たきをした火烟り通り其處をあたゝむる樣にしてありますが此が所謂オンドルと云ふのです口に窓があつて兩側が高くなつて居る、此處が土間で三方が壁である、入口の所に竈が出來て居つて此間を烟が通つて出るやうになつて居る、是で室を暖める、宜い家になると別段に火をたく所が拵へてあるが粗末な家は大概斯うで

ある、此オンドルの巾は吾々の足くびから先がちようど出るのである、モウ少し巾廣くしたら宜からうと何時も思ひますが、是は支那人は靴を履いた儘で寢るのでありますらか農事をして歸つて來るとそれなり靴だけをオンドルから出して寢ると見える、而して此處の長さが一間半位もありませうが、斯う云ふ狹い所へ三人位一緒に寢なければならぬ、それに支那の家は想像の出來ぬ程汚ない、支那人は家を建つてから一度も掃除をしないと見える、北京とか南京とかの金持は別でありますが私の言ふのは滿洲田舎のお話であります、即ち城廓以外の百姓家であります、隨分立派な置物などがありましても其上は塵が一杯ある、まして掃除をしたことがないのでありますから我々が借りると掃除をさせる、併し十分にするには二日も三日も掛りますから寢る所だけを掃除させると云ふ譯である。掃除をやり出すときりがないからホンノ寢る場所だけにして天井などはソウト其儘あたらぬ神にたゝりなしです、それからモウ一つ御話したいのは軍隊が進んで行くに從つて吾々がどう云ふ働きをするかと云ふことを御話したいと思ふ、既に上陸をしますと戰地でありますから敵と戰つて居る、其時に一軍で申すと種々の計畫がありまして右の方には何師團、中央は何師團と云ふやうに命令が下る又師團では此の隊はドコあの隊はドコと命令する、敵の勢力はどの位であつてどう云ふ方面に力を盡して居ると云ふ事か偵察してあるから此に對する戰鬪準備をして進擊に移るさて明朝何時から前進しろと云ふ命令で軍隊が進み、敵と出逢ふスルト茲に戰鬪開始され忽ち傷者が出來ます、さうすると師團軍醫部から命令が出て野戰病院は何村に開設衞生隊は何處に開けと云ふことになる、スルト命令を受けたる部隊は充分に準備して何時傷者が來ても宜いやうにしておく所が一つの野戰病院へは二百人の傷者を收容することになつて居りますが、今度の戰爭には一つの野戰病院へ六百人來たこともある、四百人來たこともある、定數以下のことは

稀なのであります、此前の日清戰爭の時には平壤の正面の大島旅團の野戰病院に付いて參りましたが二百八十人來ましたので未曾有の傷者であると云つて驚きましたが、此度の戰爭では其位は何でもありませぬ、戰爭の方面が廣うございますから一師團に千人も傷者が出來ますと衞生隊だけでは迚も運びされない。

弁口得利寺の戰爭の時私の野戰病院は最右翼隊の後方に病院を開設せり、其の時などは衞生隊が離れて居つて來る譯に參りませぬから、負傷者が澤山あると云ふことは聞きましたが、衞生隊がそれを運ぶ譯に行きませぬ、仕方がありませぬから自分の野戰病院のある所の支那人を雇つて傷者を連れにやろうと云ふ計畫をした所が、戰爭の間近の支那人は逃げて仕舞つてそれを實行することが出來ない、から止なく隊から掃除隊と云つて戰死者を片つけたり武器を拾ひ集めるために來たものを使つて傷者を運ばせる內に衞生隊が漸く來て丶病院に運搬しました、今日では斯う云ふことが度々ありまして、平素計畫した働きは六ケしいのであります、それから此衞生部員の者が單に傷者を治療すると云ふばかりでなく生命を捨て丶掛つて居る兵士であるが、自分が負傷をした時に十分治療をして與れると云ふ安心がないと十分な働きが出來ぬので戰爭が盛んになると、隊附きの軍醫を請求される、それで例へて見ると一と處で戰爭をして軍醫は治療をして進まれぬ、隊はドンヽ進んで行く、其時に軍醫が付いて居らぬと、十分に士氣を振つて闘ふことが出來ぬやうな場合があります、生命は鴻毛よりかろしと國家に其身はささげて居ても傷を受けたときに治療をして與れると云ふ安心が必要で頗る士氣に關係しますから軍醫の任又申して御座います、今度の戰爭は以前日清の役とくらべると兵の持てゐる銃器彈丸等大に進步して來ました、戰爭と云ふものは御承知の通り段々世が進むに從つて人を殺すと云ふ目的でなく、一時戰爭に堪えられぬやうにすれば足れり、殺す必要はないの

てありますから彈丸の工合も從つて大變變つてきた、二十七八年の戰爭に使つたのは日本のも歐羅巴列强のも其頭のは大概尖つて居る、元とは鉛の彈丸であつたが鉛の丸は人の身體に命中ると直ぐ形が變る、變ると廣がつて大きくなりソシテ大きな傷を拵らえた、然るに今度の彈丸は鉛が心に堅き金屬がかぶせてあるから容易に變形せず骨などにあたつたのは先づ少しく形を變じておりますが軟き部分にあたつたのは殆ど其儘である此寫眞を御覽になるとよくお分りになります。

何れから猶ほ一つ申上たいと思ふは御承知の通り此度の戰爭も相變らず日本軍が連戰連勝、此は何に起因するかと云ふに武器の精鋭軍兵の多寡ではありますまい敵の銃砲決して我に劣らず兵數亦然り只我兵は生命を鴻毛より輕ろんじ全身を國家にさゝげ二つには我兵の覺悟です縱令は千人居たものが只の一人になるとも決して後に退かぬと云ふ精神に由ることゝ思ひます。

唯生命を　陛下に實際それに相違ない、病院へ這入つた士官などに聞て見ると非常な苦戰になつて幾らやつてもどうしても落ちない、其時に兵士が何と言つて居るかと云ふと、皆異口同音にまだ是れでも退かないか、是れでも落ちないかと言つて彈丸を撃つて居る、自分には逃げると云ふ者は毛頭腦中にない、それに反して露西亞の捕虜を捕へて聽くと、日本の兵隊見た樣な馬鹿者はない、退くことを知らぬからこまると云ふことを言つて居る、其處が勝敗のわかるゝ所であると思ふ、吾々は斯う云ふ國柄に生れて參りまして、誠に有難いことでございますが、それに引換へて露西亞は兎も角も滿洲の人などは十年の間に三度も戰地になつて、さうして大變に荒されて財産は無論のこと、親兄弟に分れ其他色々悲慘な目に遭つて居りますが、それでも流石故郷で、滿洲を去つて他に行くことが出來ない、故郷は有難いものと見えて其處に住んで居りますが、吾々は斯の如き立派な故郷に生れたと云ふのは万々悅ぶべきこ

とてあらうと思ふ。猶ほ後方勤務即兵站線内のこと即ち衛生隊のお話を致さうと思ひましたか餘り長時間に亘りましたから本日は此で御免を蒙ります。（完）



大家叢談

●書痙の話

醫學博士三島通良氏談

▲書痙と神經　元來此神經衰弱には二た通ある、普通神經衰弱（ノイロアステニー）と云ふのは腦神經の弱つたものを云ひ、神經線の弱つたのは神經症（ノイローゼ）と稱す今お話をするのは主に神經症の方に屬するので、其中に書痙と云ふことでありますす、學術上の名前を以て言ふときには職業的神經症の一つであります、書痙、是は我邦には此れ迄は餘り澤山ございませぬやうですが外國には澤山あります、彈琴手痙、即ち朝から晩迄でピヤノを弾いて居る者が罹ります、それから其外には體操手痙、按摩手痙、體操を朝から晩までやつて居るので神經症を起します、其次の按摩でございますが、其術外國の按摩は大變下手なのでございますが、此手痙にかかります、下手だから尚ほ罹るかも知れませぬ。それからもう一つは電話交換手痙、近頃になりますると尚此外にもあらうと思ひますのは、先づタイプライターをやつて居る者ですとかイロイロございますが、其等を職業的の神經症と言つて居る。書痙と云ふのは、序でゞすから茲に原語を書いて置きます、獨逸語ではシライブグランプと申します、佛蘭西語はクランプ、ド、エクリヴァン、英語ではライザース、クランプと言つて居る。斯う云ふ風に何處の國にもあるのですから、立派な學術語が付いて居る、是は其名の示す如く筆記を職業として居るものに多く發するので。其外には緻密の彫刻をするもの、是は普通の美術の彫刻もございますし、又近年段々進んで來ました所の木版、

銅版、銅鐵版の彫刻と云ふやうな細かい彫刻をするやうなものにも出來るのでございます、殊に神經質の者は大變罹り易い、それから

▲學生と書痙　學生の中で殊に年取つた者日本では餘り學生の年取つたものはございませぬが、外國では禿頭の學生が澤山あります、卒業試驗に十六遍落第したと云ふのを自慢をして居るものがございますが、さう云ふものが每日澤山筆記をすると云ふので書痙に罹る。是は最も「長い時間筆を以て物を書く」と云ふのが原因ですが、其外に硬いペン細いペン軸或は細い筆とか、或は薄暗い所に鼠色の紙の上に細かい字を書くと云ふやうなことに依つて尙ほ餘計に發するのでございます、殊に速記者などは大抵鉛筆を使つて居らるゝが、餘り軟かいのであると折れやすくもあり又直きに尖きが減つて字が太くなるから餘り軟かいのも惡いが、硬ければ硬い程指先を餘計使はなければならぬ、筋を餘計使はなければならぬから、勢ひ之を動かす神經も疲れることが多い。故に平常使用する鉛筆は餘程適度のものを選ばないと云と餘計に此病氣に罹り易いのでございます。

▲書痙と細筆　それから細い筆がいけないと云ふのは、先づ此ペンシルの太さなどは通例一定に出來て居りますけれども、近頃大分細いのがあります、でペンシルにしろ、ペン軸にしろ、筆にしろ軸の細いほど之を以て字を書くには餘計に力が要るのであります。ソコデ近頃或人の考へで書痙に罹つた者を救ふ爲にペンシルやペン軸の大變太いのを造つて居ります、其ペンシルを以て書く時は、單に此指先ばかりでなく、掴んで居るやうに即ち全體の手の力で持つやうに拵らへた物などがあります。是を以て見ても細い筆や細いペンシルは餘計に手を疲らせるものであると云ふことがお分りになるであらうと思ひます。

▲光線と神經　それから薄暗い所で字を書くのかどうして惡るいかと云ふと、是は單り書痙のみならず、眼の爲に害を爲すのです、光りは明るいほど好いの

て、明る過ぎて困ると云ふのは、日光が紙の上などに直射するのが惡るいので。其外に明る過ぎて惡るいと云ふことはない、明るいほど好いのであります。ところが隨分御注意にならぬと、ランプの頂の細いのを使つたり、或は掃除が不行屆であつたり、或は油が少なかつたり、或は笠の構造が不完全であつたりする爲に、明りが好い鹽梅に紙の上を照らさないと云ふ時は大變骨が折れるのでありますから、其骨の折れる爲に眼も惡るくし、頭も惡るくする、それから、書痙を起すのであります。

▲用紙は白に限る　それから紙でありますが、大抵是まで拜見する所ろでは諸君のお使ひになつて居るのは駿河半紙のやうですが、マア駿河半紙位の紙は普通使ふに惡くはなからうと思つて居ります。併し紙は成るべく色の白いほど可い、尤も白くても光澤のある紙は無論いけませぬ、光の反射する爲に眼が犯されて害をすることになります。で此紙の種類にも注意することが矢張書痙に罹るのを防ぐの一つの手段であります。

▲書痙の種類　ところで此書痙の内に又種類がありまして此種類を學者は三つに分けて居ります、第一のものは普通の書痙或は痙攣性の書痙とも稱へて居りますが、是は拇指、食指、中指此三つの指丈に病を起すのでありまして、其内で殊に拇指と食指とに病を起すのであります。マア申さば是は書痙の中で一番輕いので、又數も多いのであります、第二は是は私は假に書震と書いて置きます、是は字を書く時分に手の震へるのであります、それは今申した指ばかりでなく手、前膊等が病に罹つて尚ほ進んで上膊が罹りそれから肩まで行くのであります、此に至つて文字を書く時分に所謂震へ書とか或は蚯蚓ののたくツたやうな字が出來るで、震へるのと蚯蚓ののたくりとは違ふのでありまして、震へると云ふのは斯う云ふ風に線が書けるのであります、（～～～）蚯蚓ののたくりは眞つ直ぐに書かうと思つても（～～）斯う云ふ風になる、それを書震と謂ふ、それから第

三に肩痺と云ふのがあります、是になると最早此肩痺の絶頂に達したので、手が痿れて書くことが出來なくなる、ソコデ其場合には手に倦痛を覺えて來る、此痛みは時としては腕ばかりでなく進んで肩にまで逆することがある、是が先づ肩痺の一番重い症狀であります、ところで普通最も多くあるのは何かと云ふと、一番初めにお話した肩凝でありまして、是は私なども時々罹ることがあります、諸君も定めし時々お覺えのあることであらうと思ひますが、斯う云ふ場合には、大抵第一の右の拇指と食指が硬くなつて來る、それが少し進んで來ると筆を持つて居て其筆を運すことが困難に在るやうに硬くなる、さう云ふ場合には同時に橈骨の方の側に矢張り倦痛の感覺があつて、それから進んで來ると俗に所謂肩癖と云ふのを起して來る、それから頭痛が起つて來る、斯う云ふのが順序であります、先づ大抵其邊まで來た時分に早く注意をして療しませぬと、重症の肩痺になつて仕舞ふのであります。

▲肩凝の豫防法　肩凝に罹るのを豫防することゝ、是に對する素人療治はどう云ふ風にしたらよいかと云ふと、豫防は申すまでもなく長く續けて筆記をすると云ふことを第一に避けるのであります、即ち時々休息してさうして前の疲勞を恢復してからあとの仕事を續けると云ふのが一番よいのです。是は敢て此肩凝ばかりではありませぬ人間の身體と云ふものは大抵酷い刺戟でも時間の短かい時は能く耐へるのであります、之に反して刺戟は弱くても時間が長く續くと云ふと非常にこたへるもの、其一例を舉げて見ますと、寒中でも隨分手桶に一杯位の水をザブッと頭から打つ掛けられても、直ぐに拭つて衣服を着て仕舞ふと、先づ寒冒に罹るやうなことは少ないが之に反して霧のやうなジク〳〵雨の中などを二三時間も歩るいて居ると、先づ大抵は寒冒やレウマチスに罹る、痛みもさうです、所謂俗に一と思ひにグッと云ふやつはソンナに痛くないが、針の先か何かでチク〳〵と長く突いて居られたら其方が非常に感ず

る、小言もさうでせう、ガミ〱やつ付けられてをれ切りでお仕舞になるのはよいが、朝から晩まで姑が嫁をイビルやうにチリ〱やられて居つたら溜らぬ。

▲職業的戰場　兎角日本人の仕事はダラ〱長く遣る風がある、外國人は休む時は休むと云ふ風に片付けて仕事をする此は美風である、習はなければならぬ、然し誰しも職業に從事する時は已むを得ず努力せねばならぬ事がある、丁度軍人が戰場に出た時は食ふ物も食はず、風雨に曝らされ生命を的にして戰はなければならぬと同じに我々は傳染病の中に飛込まなければならぬ又夜中に叩き起されて病人の傍に行つて眼はパチクリさして居らなければならぬ、是は人間の職務であるから斃れるまでやらなければならぬ、特別の場合はさうであるが出來得るならば疲勞した時は一時それを休ませて、又後の仕事に掛る樣にして行かなければならぬ、けれども其場合には自分が餘程心を締めて居らなければ休む方が多くなつて仕舞から注意しなければならぬが。

▲身體の經濟的使用　兎に角人間の精神なり身體の働きと云ふものは、使ひ方に依て能く損ねないやうにして行くことの出來るものであると云ふ理屈を腹の中に入れて置けば、隨分經濟的に使はれるものである。ソコデ諸君にしても先づ明日はどうでもこうでも長い時間自分一人で續けて速記しなければならぬと云ふやうな場合には、成るべく其前日に體の用意をするのである、其用意の仕方は、前日に成る丈體を休ませて、而して適宜の運動をするとか、先づ相當の滋養のある物を食ふとかして前日に能く休養して置けば、其翌日行つて非常に過度の仕事をせねばならぬ場合でも、大に之を補けることが出來るそれから其外に平生豫防としてやるべきものは何んであるかと云ふと、適度の運動、殊に此上肢運動であります、其上肢運動をするには決して重い物を持つて運動するのはよくない。近頃大變に流行して來ました彼のサンドウの鐵亞鈴、私の見る所では鐵亞

驗に依つて得る利益よりも受けて居る害の方が多いと思ひます。

●感冒の注意

某醫學博士が談にて時節柄防寒の參考にはなるべし普通の體溫は男女とも大抵三十六度九分から三十七度迄にて勞働中は三十七度五分位までは昇る事あれど睡眠中は三十六度九分以下に降る事あり平均三十七度として何時も其溫度を保つてさへ居れば兎角は無けれど卒突に強き寒さに襲はれ體熱發散して急に三十七度以下に降る時に當つて若し身體の一部分咽喉なり腹なり手足なりが此寒氣に抵抗する丈の準備が缺けて居れば風を引く譯なり何故かといへば寒氣たゞ防寒の用意なき一局部を襲へば其局部の體溫は發散し其後を體內の含水炭素や脂肪分などが相化合して熱となつて補充し更に來るべき寒氣に對する體溫は卅七度以上となり後の寒氣には犯されざれど其代頭痛がする風邪をひくといふ者にて皮膚が寒氣に抵抗して十分之を防ぎ得る丈强壯なれば決して風邪に禦る事はあらずされば第一の注意は體溫の放散を防いで平時も三十七度位を保たして置くの要あり例へば放尿の折身顫ひをする是膀胱に溜まりし小便の熱丈が急に發散して減ずる爲にて直に其不足を補ひ得ればよきもの丶万一營養不良とか皮膚に薄弱な場所でもあれば再び補塡の熱を發する迄の間に風邪をひく事あり又は冷飯を食て身顫をする是も前同樣の理由にて急に胃の腑に冷へたる品が這入れば體內の溫度は其冷飯を溫めて溫度の平均を保たせんとす風邪を引くは此間にあるなり斯れば壯者よりも老幼者男子よりも女子の方が風邪を引く事多しとぞ婦人に關しては婦人科專門の博士千葉稔次郎氏の談に曰習慣の上から體質の上から日本の婦人は感冒には罹り易きものにて婦人の仕事は大抵家內にて足れば外氣に觸るゝ時少く自然皮膚の抵抗力弱く殊に男子と違つて月經時や姙娠時などは血脉に變化を來して神經過敏となり食物迚て進む事あれど外界に對する抵抗力は弱くなるばかりなれば努めて外界の刺擊に抗抵

得る樣に注意せねばならず冷水にて拭もよし轉地療養も宜し要するに平生より心して外氣に對する皮膚の抵抗力を强くすれば宜い譯なり尤も男子でも老人や持病持には腰が冷へるとか足が冷へるとか乃至は腹が冷へるとか夫れ〳〵一局部丈特に冷ゆる者あり女子には殊に此事多くては神經作用にも依れど月經時とか姙娠時とか云ふ時は餘程氣を着けねば風邪をひくものなり月經時に感冒になれば月經不調となり子宮内膜炎を發す恐れあり姙娠中などは全身の機能がいづれも變化して居り血液の量も一升のものは一升一合にもなつて量の上からは增して居るも其實稀薄になり居る事とて種々の病を惹起すもの其際感冒に罹れば大抵腎臟を害ひ終には腎臟炎となる事あるべし時には此感冒の熱の爲に血液の循環が惡るくなり從て胎兒の發育を害し遂に死産流産と云ふ如き忌はしき結果を見ることあり夫に外出の折の如きも內に居る時はこて〳〵綿入を來て暖たかくして居ながら外に出るとなると體裁を繕ひ薄着を見榮とする如きは感冒に罹る場合を造るやうなものと云べきも一つは外出の際は可成步行する事にて（尤も體力相應に）萬一乘物に乘る場合には人車より電車が宜しこは四周が硝子戸で閉め切りありて外氣の襲擊が少なければなり其他注意すべきことは澤山あれど感冒に罹らぬ樣にする第一の要義は皮膚の抵抗力を强くして外氣に犯されざる樣にせよとの事に結著するに過ぎず云々

●飮酒の兵力に及す影響

醫學博士片山國嘉氏の過日國家醫學會に於て講話せられたるものなり今其大意は左の如し

目下日本軍が連戰連勝の狀態にある事に付き外人中説を爲す者あり米國の或醫士の如きは其原因軍隊の禁酒同樣なるにもありと云へり之に反してタイムスの日露戰爭批評中には遼陽攻擊の際日本軍隊は酒を飮みて勢を付け猛進せしに後非常に疲勞して多大の損害を蒙りたりと説きたりされど余は之を非實と考ふる能はず一時の疲勞を酒に依て救ひ酒の勢を

借りて進撃するが如きは規律ある我軍の決して爲さゝる事と信ずればなり今酒の兵力に及す影響を區別して直接間接の二種とすべし戰場に於て酒を飲むの利害これ直接の影響にして酒を飲む者が國民に多數なれば兵力の上に如何なる關係を及ぼすやとは是れ間接の影響なり今直接の影響に就いて云はんに攻撃の際酒を飲めば一時勢を增すが如きも二三十分も經過せば必らず飲酒前よりも疲勞を增すべく且つ思慮淺くなりて注意を要する戰鬪を爲す能はず左れば歐洲に於ても曾つて酒を軍隊の必要品と爲したりしが今は全く不必要品中の不必要品となすに至れり殊に一二の實例を示さんに一千八百六十二年佛國が露より敗を取りし時疲勞せし隊と然らざる隊とあり後之れを研究せしに疲勞せし隊は平素より酒を飲みし兵士にして疲勞せざる隊は酒を飲まざる兵士なることを發見したり又酒を飲む兵士は寒氣に抵抗する力少なくして往々病に罹るものなりクリミヤ戰爭の際酒を飲みし兵も戰場に於ては飲めざるものとして平素より其習慣を付け居りしに或市街地へ入りし時自由に酒を飲む事を得るにより假に病兵を增したりといふ又南北戰爭の際ソトマック軍隊が炎暑中行軍せし時ウイスキーを用ひし隊の健康狀態宜しからざりしを以て命じて之を廢せしに果して舊に復したりとぞ又海上にての實例を示せば曾てアウスタリヤの北極探檢者はハルマチン人と北部の人間とを率ゐて出發したり左れど平生溫暖の國に生活したるハルマチン人は寒氣の爲めに到底物の役に立つまじと思ひしに彼等は平素酒を飲まざりし故を以て非常に能く働きたるに反し北部の者は寒氣凌ぎの酒を飲むに慣れし爲め其動作却て遠くハルマチン人に及ばざりしよし又獨逸の或鐵道技師は工夫を二組に分ちて甲には酒を與へ乙には與へずして同時間内同一の作業に服せしめしに酒を與へし組は飲めば渴し渴しては又飲みし爲め身體疲勞して其時間内に作業を終る能はず之に反して酒を與へざる組は見事に其課程を終へたる上他の作業をも手傳ひたりとなり次に間接の影響

に付て述べんに飲酒家の子孫には白痴、瘋癲、啞者、不品行者、犯罪人多く且つ徴兵檢査の際合格する者少なし即ち酒の消費高多き國は徴兵の不合格者多くして徴兵不合格者の多きは常に酒の消費高に比例すと云ふも可なり國民たる者豈國家衞生上よりして酒の害を防止するに勉めざる可けんやグラッドストーン曰く酒の害は戰爭、ペスト及び饑饉を合したるよりも更に甚だし云云と述べられたりと。

寄書

◎郵便切手に就て

竹中成憲君

郵便切手を封皮に貼布する爲め普通一般に之を舐むるを例とするも其切手が本人の手に入りしまでには如何なる不潔物と相觸れたるや知るべからず、ましてゴムの附きある以上は塵埃離れ難し結核菌が口中の扁桃腺より吾人の體内に入る事の知られある以上は何品なりとも飲食以外のものを口にするに當ては注意せざるべからず皿に水を盛らしめ之にて濕すを良とす通信繁忙の人は海綿に水を含ましめ置くを便利とす洋人中には硝子製の小車輪の如きものを水に浸し車輪に切手を當て丶車輪を一回々轉せしむれば切手のぬるゝ仕掛となしたるものあり新聞社雜誌社の如く一時に多數の切手を貼用する場合には布片(ふきん)を濕し其上に切手を並べぬらす事よし特に注意すべきは信書を受取りたる場合なり肺患者の貼布し遣したる切手の裏に結核菌の存在し得るの事實は夙に遞山博士の報ぜられし所なり。

茲に注意すべきは古切手(使用濟郵券)を集むるの慣習日に月に盛になれる一事なり予自身は明治十年より此事に從ひ未だ曾て病臥時の外之を廢したる事なく本邦に於ては菊地大麓閣下の如き予に先ち之を始められたる人なきにあらざるも醫界に在ては蓋し予

を以て元祖と爲す數年前よりは三宅秀閣下の如きも熱心に勉めらるゝが如し此事たる大人に在ては古錢を集むるものゝ快樂と伯仲すべく兒童に在ては貯蓄心を起し各國のものを集むるに當ては其國々の民度、風俗を慰みの中に知り分類に際しては事物を整頓するの才を養ふの資となるものにして善事たり殊に日露の大戰爭に於て戰捷國となりたる以上は「日本」の二字の歐米下級界に馬耳東風視されたる昔に反し古郵劵賣買の市場に於て重視さるゝは勿論にして戰捷紀念の切手にても出づるときは十年の後は一片の反古も數圓の價を有するに到ること必せり

予は此事を諸子に勸誘すると同時に注意したきは上記の如く切手貼付の時に病毒を含む事なきにあらざるの一事なり古きものを紙片より剝離するに當ては決して之を舐めしむべからず。

因に諸子に傳へたきは衞生に關係なき事なれども兒童の爲めに興味ありて大人も亦便利なる予の考案に係る。

●信書輕便定量法

なり予は箸の兩端に同一大なる厚紙の小片をぶらさげ箸の中央に糸にて撮を作り左右を平均せしめ一方に信書を載せ一方に貳錢銅貨を置く信書の方輕ければ郵稅參錢にてよし（貳錢銅貨なきときは壹錢銅貨貳個にてよし）信書重きときは貳錢銅貨壹個を增す毎に參錢切手壹枚を貼付すべく即ち銅貨貳個迄は六錢と知るべし

（理由）貳錢銅貨は重量四匁なり、四匁迄は郵稅參錢とす、

壹錢銅貨貳個は貳錢銅貨壹個に同じ

右は家庭に於ける慰みにして兒童の爲めには智育の一材料となるべし

序ながら使用濟端書を集むる事につき笑話あり予が家は「はがき」も總て捨てぬ事としてあるゆゑ青森市に居つた頃非常に澤山となつた、所で引越となり妻は其かさばつて且おもきに愛惜をつかし之を屑屋に二束三文で賣た、數日を經て學士會が予の送別會を

開て見れた、席上初對面の一人が予を見て笑ひ且予の內情に頗る通曉して居るらしい、其人の曰く「僕は此頃此地に赴任して來たが僕の宅の壁に一枚君の「はがき」が貼てある隨分面白いのがあるぜ」と茲に於て知る彼は予の內情を壁より聞きたるなり「壁に耳あり」とは此事をいうならめとて一坐哄笑す蓋し「はがき」の中には借金(?)の催促もありたるならむ、衞生に大關係なきも婆心ながら世の人の注意にまで一言を添ゆ

●小兒の食物

此記事はドクトル川瀬元九郎氏の所説にして[illegible]婦人に掲ぐる處なるが有益なるもののゆへ茲に轉載す

小兒の食物は日本には餘程少いやうであります滿一年まででは牛乳でありますが夫れより後十五ヶ月間迄の子供の食物を申し上げますと一日四回四時間置きに一日四十オンス乃至五十オンスの食物で其五分の四は牛乳其五分の一は何か大麥の粉又は小麥の粉にて作ッた「グルーエル」を飲ましめ始めは一日一度中食位の時にビーフジユースを匙に一杯位やり段々ましてニオンス位與へます又隔日位には三オンス乃至六オンスのチキンブロスを與へるがよろしいこれ等の者を與へた時に牛乳の量は平日の量から半分乃至三分の二を減ずるを常とします又至つて甘き密柑及ならば桃の汁一二オンス位づゝ食事の一時間前に與へるがよろしうあります

●グルーエル　其製造法を申しますと大麥又は小麥の粉をスープを飲む大きな匙に山盛り三杯程煮え立ての湯に入れよく交ぜ牛乳二合に鹽を少し入れ又玉子の白みをよく打つてそれをまぜて作るのであります

●オートミール、グルーエル　オートミール山盛り二匙を四合のお湯に交ぜ「ダブルボイラ」に掛けて三時間半煮てこれをこして用ゐます

●ビーフジユース　牛肉の油のない處をビフテキのやうに切りそれを火の上にて內部まで火の通くやうにあぶり夫れを小刀で切ると汁が出ます其汁に鹽を

まぜて加減して作るのでありゝます

◉チキンプロス　鷄の骨と肉とをまぜて五分位に切り目方一斤に水四合を加へ「ダブルボイラ」にかけて二三時間又は水が半分になるまで煮ます其煮える間に上に浮ぶ油を取捨て〳〵之をこして鹽を少し入れつめたくなッた時に用ゐますこれに御飯を少量加へてもよろしうあります

西洋洗濯法

此稿は浪華なる婦人世界家庭欄を一寸拝借して（信愛女學校ベンナルシム師述）

▲白毛糸製肩掛　此洗濯は水なしにして肩掛の裏らからむらなき様に「メリケン粉」をふりかけ丁度メリケン粉の中に肩掛を包みましして風のあたらぬ様に四敷にても包みまして一週間ほど置きます夫れから出して風に干すと誠に白くなりますす水で洗ふてはいけませぬと云ふは堅くなるからですが油垢の付いたのは止むを得ませぬ肩掛一個にメリケン粉百目の割で餘り汚れたものは二度くり返へすのです

▲フランネル　是は熱い湯で洗ふてはいけません又水に浸けて置くのもいけませぬ固くなりますされば フランネルは水に入れるすぐ石鹸つけてもんでしぼつて干します

▲毛糸製靴下　水にて石鹸を付けてよくもみすゝぎましてて又石鹸をつけてもみ澤山泡をだしてその泡のまゝ干します（泡のまゝ干します皆様は不潔だと思ひなさるでしやうが斯様にすると大變温かいです

▲日に干し方　靴下は必らず裏から干さねばなりません表から干すと色が變りますから白、黒其他の色ても皆裏から干します

▲毛糸の洗ひ方　微温湯で石鹸をつけてもみます

▲羅紗　油の付きたるには石鹸で洗ひ蠟のついたのは水で洗へばそぐとれます湯で洗ッてはよくありませぬ（記者曰く蠟はベルゾル、エーテル、テレビン揮發油でよくふけば取れます）又襟垢のついたのは

黒い毛の切れに揮發油をつけ拭き五分間ほど日光に干せば臭氣はありません

▲白き襟　汗で赤くなりましたのを取りますには石鹼を付けてもみ泡が澤山出ましたとき日に干し又夜露にあて（一日或は二日）水にて洗ひます

▲干し方　靴下の外は表から干しますシャツなどは裏から干しますと虫や塵がついていけませぬ

▲メリヤスのシャツ　白色のものにかぎります色のものは灰汁に入れることはできませんが更紗ははげませぬから差支ありません

▲洗濯と微溫湯　熱い湯では垢がとれませぬ微溫湯がよろしいです



お正月もだん〳〵近くなりますから皆様も暮の内御用意の御参考にと献立を取りあつめてお正月の時へ

●食つみ

此食つみの式は昔しより貴も賤しきも年の始めの食始めとして一家族打寄て行ひたる儀式なり、その飾り附けは、三方に奉書紙を敷き其上に白米を山盛りにして上に橙、鰕、廻りには榧の實、ほんだわら、こんぶ、干栗、抔くさ〴〵の物を盛りて備へたるものなり、いかなるわけにやとおしたづぬるに此くさ〴〵の物の中には滋養ある物又は藥餌に用ゆべきものも含みあるが故に之を取り交て食すれば一家のもの丶壽き永からんため衛生を重じたる古式なりと、されば一月三ヶ日雜煮を食するも此の例にしとしき禮あるべし、

●盛出し雜煮

雜煮の拵へ方は國々の風にて多少の違ひあれども一般に餅は一家の和合を形取りて祝ふものなれば丸形をよしとす、府下なぞは大方四角なれども之は手間をはぶきたるものなるべしされば形はいづれにせよその元をたゞし且つ味の良を賞翫すれば目出たし

○大皿又は大鉢の片かわに餅を盛り（餅は餘り大きからぬをよしとす）一方にあしらへものを盛り茲に載せ清汁を入たる鍋を火ちりんの上に置きいづれも客の前に持出し拵らへながら客に進むるは中々興あるものなり今其あしらへもの丶取合を示すに左の如し

○鳥類、ちくは、糸蒟蒻、蕪菁、胡蘿蔔、鹽松茸、芋、みつ葉、

○焼鳥の類又は一ト鹽の魚類、芋、菜、牛蒡、大根、昆布、つと豆腐、

○かまぼこ貝のはしら（又は貝類もよし）椎茸、くわゐ、芹、焼豆腐、

○するめに、昆布、菜、蕪菁、芋、白魚干、

○其他何肉にてもあしらへによし

●雑煮のあしらへもの

○野菜類は大かた湯がくべし

○鳥と肉類は是も一寸湯がきたるをよしとす略せば生のまゝにてもよろし

○するめは水に浸し柔らかになりたるもの

○魚は焼くものは焼き一ト鹽のものは一寸湯がくなり

○ちくは、かまぼこ、貝類は湯がくに及ばず

●正月の貯へ肴品々

大根又は蕪菁を極薄く輪切にし二三日間日に干してひたる時芥をかたくねり干たる大根を引き延し其中へ入れ小ゆび位のふとさに巻、こん布にて結びその凍たる大根を浸すために、三杯酢を少し（大根に吸ひ取るだけ）器に入れ其巻たるまゝ暫時浸し置き取合の肴とすべし、

●小鯛の酢漬

小鯛を幾尾にても鱗と腸をとり全體のまゝ鹽を強くふり懸け半日程置きて後其鹽をしためて生酢を充分に懸けて半日其まゝに置又其酢をしためて此度はさらに器に入れて三杯酢を甘く拵へ其上に懸け翌日より食すべし骨もあたまも柔らかになりて殘りなく食わるゝものなり

●鯊の酢漬

鯊を白燒にしてあたゝかき處へ三杯酢を懸けて蓄をなし翌日より食すれば是も又骨とも柔らかにて妙なり又鯊は白燒にして暫時醬油と砂糖と鰹節とにてとろ／＼甘く煮れば甘露煮に尤もよし

●薄板牛蒡の油あげ

牛蒡の太き品を六七寸に切り、ざつと湯で竹の細く薄き箆らを皮と心との間に通じて湯の中に暫時入れ置き而して後ち下の方より其心を推せば其まゝ逆に抜けて管となるなり其管の破れぬ樣に味つけて下煮し其管の中へ魚の擂身を詰め込み、ころも懸けてあげ、而して之を斜に小口切にせるなり、その魚の擂り身とは何魚にてもよし魚を片身づゝにおろし骨を去り皮を剝ぎ少し鹽を加へて擂鉢にてよく擂りたる生身なり

㊅七色なます

初め大根と蕪菁をせん打にし、（略せばなますおろしにておろすなり）擂鉢の中に鹽少しふりかけ揉で之絞り、而して椎茸、と相良麩は細かにきざみ淡味をつけ、蓮根は湯でゝ薄くきざみあぶらあげは二つ割り庖丁にて中の白豆腐をこさぎ取り上皮のみを細くきざみ、白ごまを煎りて擂鉢にて擂る時前に油あげの中より出したる豆腐をも一處に擂交せ酢と醬油と砂糖にて加減を爲し他の品々と共に、干柿、味柿、樽柿いづれにてもよし程よく切りて一處によく攪交ぜるなり器に入れ上の處に柚子の皮を薄くきざみちらしに懸けて食すべし但しあしらへものを二た品減ずれば五色なますとなる之は一週間よりも長く貯へて差支なし却て味ひよろし

㊆鴨の吸物

鴨の身を薄く切り、骨は能くたゝき丸め、ざつと淡味をつけ鹽梅醬油に、三ッ葉を一寸位に切り常の清汁にて吸口は柚子又此中へ餅を小さく四角に切り一寸燒て二ッ三ッも入るれば雜煮の氣たいとなるなり

㊇蜜柑の菓子

初めかんてんを半分水四合の鍋にて煮るべし、蜜柑

は凡大なるを十五位之を横に七分三分に切り上の三分を蓋となし下の七分は中の實を拔き出し其中へ甘寒のしぼり汁とかんてんと砂糖にて煮つめたるものを流し込むなり此十五の甘寒の汁のみにて不足なる時は他の小さき甘寒の汁をだすべし砂糖を入加減をしどろ〳〵となるまで煮つめて前に實を拔き出したる中へ入れ、而して蓋を爲し暫時置けばかたまるなりかんてんは餘り堅からぬをよしとす、此蓋の取手あるもあらぬとも茶の木の葉、又は椿の小さき葉をさし込めばちぎりだての甘寒のやうにて見はへ美くし之を客に出すには皿の上に一ツ載せ匙じを付て進むべし、食後和洋兩用に出す上品なる菓子なり





質疑欄

●質問注意●　質問中診察せざれば應答し難きものは一切解答せず又答所に評述あるは登載順に都合ある所と御承知を乞ふ●質問は端書にても封書にてもよろしけれど單に質問のみなわかりよく認むる事●質問に姓名を出すことを好まざる方は匿名にても差支なきも事務所へは姓名御通知の事●本號の雜誌に登載する分は凡前月十五日迄に申込まれしものとす●總て急ぎの分は個答とす

質問者　信州の一會員

問　乳癌と申す病氣は乳に出來る腫れ物の樣に伺かつて居りますが其の原因と豫防法療治法伺上候

答　此病氣は四十過ぎ五十六十になつてから起るのが多い此乳癌と云ふ惡るい腫れ物は何時でもお若い中に乳を痛めて膿を持つたり拆致したもの計りに、出來るものかと言ますれば、さうでもありません、乳を痛めた事も何にもないものに起る事が多くあります、併し時に依れば乳を膿してカタマリの殘つて

居たり或は乳を與へないでカタマリが出來て居つたのか、年を老つてから悪るくなるのが度々有ります。通例是れ迄の處に依つて調べて見ますと、三年四年位ゐ掛つた上で、漸々悪くなつて遂に生命を失られる樣な事になります、極く稀れには癒る樣な場合もありますか、是は何うも癒らない方が多い樣であります必らず三年四年の後になつてから、其爲めに生命を失られる事が多くあります、お若い中に乳を痛め、其爲めに、始終一生の中には氣候の變り目に痛んだり抔致したものか遂に乳がんとなつて生命を失られる樣な、不幸中の最も不幸に陷る事が有ります、乳が病氣に掛る其原を尋ねますれば、始めて産をした後に不注意をして乳首の邊の皮が破れて乳が腫出し、次にカタマリが出來て、後には斯樣な悪るい腫物が出來ると云ふ順序になります。決して何時でもさうであると云ふのではありませんが、時に依ればさう云ふ樣な不幸のものになります。是れは稀な事であると思召す御方があるかも知りませんが、さう稀な事ではありません隨分多く有ります、それ故にさう云ふ病が無いにしましても、始めて産をするとか、或は何時でも乳に疵を付けたとか、乳首の邊の皮がむける樣な事がありますれば最も注意して、早く癒して仕舞はなければなりません、極く僅かの物であると思つて放つて置て、後ちになつては終に取り換へしの付かん樣な事になります。始め皮がムケタとか、疵が付いたとか云ふ位ひの事ならば、直に癒つて仕舞ふので有ります。

猶大切の事は疵の付かない中皮のムケない中に、疵の付かない樣皮のムケない樣にするのが大切であります。夫には殊に皮の薄いキメの細かい御婦人であるならば、常々皮を丈夫にする樣に、キメを丈夫にする樣に、妊娠をして居る中に産をしない中から、其皮を固める樣に注意なさらなければなりません。夫れにはツメタイ水で乳の邊を拭くとか或は酒で拭いて固めるとか云ふ樣にするが宜しうあります。又乳首の小さいお方なれば、妊娠の中よりして、少し

づゝ引つ張る樣にすれば次第に大きくなりまする。

而して始めて乳を與へる時分には、乳首の餘り小さく無く、皮の餘りに柔かくない樣に出來ます又始の中に注意して置きますれば、幾ら乳が附てい居つても乳の處が濡れて居つても、皮のムケる樣な事は無くして仕舞ふ樣に出來樣と思ひます、又自分の乳斗奇麗にしたとても往けません、小供の口の中に乳が附いて居つて、それが不潔になりまして、其不潔いものが乳に附着して乳の皮がムケ易くありますそれですから自分の斗りを奇麗にした處が、迚も往けません、常に小供の口を奇麗にする樣に致しますれば小供の爲めにもなり、亦御自分の爲にもなり、兩爲めの事で御座います故始めから、御注意なさるは宜しい事で有ります。

然れども、若し不幸にして傷が附き皮がむけました時は早く療治をしても、是が膿む樣になつては最う遅いと言はねばならぬのであります、膿んでも早く之を處分して截つて仕舞へば宜しう御座いますが截るのがいやだとか何んとか云ふて恐々して居るときは必らず手遅れになります手遅れになれば遂には乳を殘らず截つて取らねばならぬ樣になります乳を截り取つて癒ればよいですが夫れも癒らずに遂に生命を失すと云ふことにもなりますから是れは些細なことでも初めからよく〳〵御注意なさらねばなりませぬ

問　食事をします時間は昔しからの習慣は早いのを貴びましたが今は反對に長いのがよいと申す事ですが右は何分位が適度に候や伺上候

質問者　大阪一會員

答　凡そ食物をよく嚙むと云ふことは尤も必要なことで胃病などの氣味のある人達は尚更のことでよく昔の人は御茶漬が好きだなどゝよく御飯を嚙みもせず御茶で流し込む流義がありますが之は大なる間違いで口中に食べ物が長く止まつて居るだけ夫れだけ食物がよくこなれて胃が樂をするので熱い御飯や御膳に生卵を掛けまぜて食べるなども決してよくない

のです何故悪いかと申すと御飯を卵子の液でくるんでしまいますから丁度御飯に着物を着せたやうなものでありますー體食物を口で嚙みます自分には唾液が出て其中のプチアリンと云ふものがよく食物をこなすのですしかるに鶏卵を御飯にかけたり御茶漬などにすると碌々嚙まずに胃の腑に追いやつて仕舞いますからプチアリンの働らく暇がないのでありますさうですから食物を口一杯に頬張ッて汁で流し込む様なことはいけませぬ必らず食物はよく嚙んで汁は汁で別に食べるやうにせねばなりません夫れに就て食べ物を食べる時間ですが之は可成永いのがよいのて一椀の御飯に十分三椀なら三十分もかけて召し上がることを望みます是れは一概には出來ませぬが段々に慣らしてソウ云ふ習慣にすれば為めに胃病も起らぬ様になります

東京一會員

問　しもやけの療法御教示被下度私方の下婢は毎年手の中にしもやけ出來見るも憐れに候間此段御願申上候

答　是れは冬になると大抵の人は之に罹りますが其尤も多く出來るところは手、足、耳、鼻、頬などで紫紅色の斑點を生じ指にてをせば此處は他の部分より高く何となくほてりて夜分あたゝまると痒ゆみを感じ甚だしきは辛抱の出來ぬ程かゆきことがある重いのになると終に腫れ上りて水胞が出來き又破れて其部分に潰瘍が出來まして尤も甚だしきものは壞疽に陷り皮膚は勿論肉も骨も取れ去ることがある之は満州の氣候などでは其土地に慣れぬものに屢々見るところです併し御婦人方にはまづかゝる重症はないことですから顔手などに出來ました場合には清潔なるアルコールを綿或は布片に浸し之れにて其上を拭ひ後ち左の膏藥を塗り置くこと

カンフル油　一、〇
ラノリン　一〇、〇

足に出來きたるときは

沃度

沃度加里　　　二、〇
蒸溜水　　　三〇、〇

又しもやけ潰れには五%の硝酸銀軟膏尤も効ありと知らるべし

序に「ひゞ」「あかぎれ」にはベルツ水又は五%の硼酸ワセリンも又効能顯著なりあかぎれには右の藥を布片(リントなれば尚よろし)にのばして貼付すべし坊間賣る處の膏藥の如きも又効あり

質問者　高崎一會員

一、問　本年四月肋膜炎に罹り病院にて治療致し一ケ月程にて全快其後右の肩よりうで夜分痛みを覺へ候如何の譯にや全治法伺上候

二、四十七歳の婦人鼻にこしやう出來少しも匂ひが通せずせきが出てはなにたんが非常に多く困難致し候醫師に三ケ月程もかゝり候へどもさつぱり効ゐ無し全治するものにや良法御教授願上候

答　肋膜炎と申す病は治癒しましても跡の養生を充分なさらぬと再發する例は少しも珍らしからぬことなれば右の肩うでなどの御痛みがあれば素人療治などなさらずに早く醫師に見て御貰ひになることを御すゝめします診察もしないで此紙上で想像の事を申し上げるのは不親切のことですから右に御承知を願ひます

二、は素人がして差支ないものは鹽水を鼻から口に出すようにしてよく鼻を洗うことですがこれは中々痛たくて困難なことですがこれはどうしても耳鼻咽喉科の專門家に罹られるのが一番よいので東京では麹町の岡田博士駿河臺の金杉博士などに見て御もらいになつたらよいと思ひます

地方の一會員

問　二十二歳の女子さして身體にさわりなけれども讀書中種々の事を考へ且記憶力確かならず月經は常に普通より早くして左の通です打ちやつて置いても差つかへありますまいかどうぞ御教示を願ひます

答　月經は毎月少しづゝ早くなるのが普通であなたの月經表を見ますのに決して異常はないようで先づあたりまへと思ひます種々の事を考へ又は記臆力確かならざる理由は察する處腦がわるいか胃が惡いのでしやうから醫師の診斷を受け當分讀書をやめ閑靜なところでのんきに靜養なさつて御覽なされ而して其病に關する手當をするのが緊要と思ひます醫者とよく御相談遊ばされよ腦の病は兎角なほりにくゝ治つて又時々はじまるには困ります

問　　肥前　立野階子

ゲンノショーコ（俗にネコアシ草）と云ふ草をかげぼしになし煎じ服用するときは下痢を治するの効あるや否や御教示下されたし

答　ゲンノショーコは古來より民間に使用せられたるものなれども決して特效藥となすべきものにあらず單にゲンノショーコのみを以て赤痢を治せんとするは至難なり要するに之を使用するには赤痢の早期に於て利あるものゝ如く內服もよけれど慢性赤痢には內服することは殆んど無効ですが灌腸は比較的効を收むるものゝ樣です

中外彙報

精神病の誘因

田端腦病院長の談を見るに同院收容の患者九十二名の內婦人の數三十餘名なるが同院長の調査せられたる誘因統計は左の如しと

▲精神的誘因

原因	男	女
家族近親の疾病死亡につき苦心	三六	二二
財産上即ち貸借、負債	九〇	二二
相續上	一六	〇
失敗落膽及び損失	三四	八
男女の關係失戀嫉妬	三六	一四
離婚と結婚上	二二	一八
處世上の苦心	三〇	二
政治上名譽上の苦心	一四	二
業務の熱中	二四	〇
家内不和（家庭事を含む）	二八	二六
試驗落第	六	〇
徴兵に關する苦心	一〇	〇
訴訟及び其他	一〇	二
感動（驚愕、恐怖等）	二六	〇

	男	女
地震、火災、水難等	六	四
自己の病を苦にするもの	二	〇
迷信	六	六
苦學及び其他の苦心	三二	四
家族の身上に就ての苦心	八	四
子の無きを苦にして	〇	二

以上は發狂するに至りたる原因なり

▲肉體的誘引

原因	男	女
腦病	一四	四
神經病	一四	三六
梅毒	五六	六
中毒	二	〇
急性病(インフルエンザをも含む)	一〇	二
如上の外の病	二四	八
外傷	一六	〇
房事及び手淫	六	二
産褥及び分娩	〇	八
生來の薄弱	一六	二
破瓜	〇	二
酒	八〇	二

右は發狂に關する素因とも云ふべきものなりと又同院長は戰爭時の精神病に就き普佛戰爭當時の如きは

夫の戰死を耳にして心を失ひし妻伜の從軍に魂を失ひしもの或は愛兒に別れて心神に異狀を呈したる父母など甚だ多かりしとの事なるが我國にはかゝる氣弱の男女はなきも順良なる婦人中には此類を見ることなし戰爭後は過勞の爲め發狂するもの少からずと又警告し

▲離婚と精神病　我國にては離婚を左まで重大視せざるは一大缺點なり之れが爲め婦人にして斯かる事を元として發狂するもの極めて多く又結婚期を過ぐるも良緣なきを恥ぢて發狂するものもあり要するに婦人の發狂は滿二十四五歲より四十歲迄の間に多く殊に婦人の精神病に關し尤も注意を拂ふべきは

良人の放蕩(例へは遊ぐるいの如き)を苦にしたるとき

子供のなきを苦にしたるとき又は子供の放埒を苦にしたるとき

嫉妬的苦悶は其中にも尤も多く

又迷信は最も注意するの價あり此狂者は法華教信者

は天理教信者とに限られたるもの丶如しと

▲男狂と女狂の言語　男子は大金をこしらへるとか大臣になるとか時々口を開き壯語するも一體に無口の方なるも女子は全然オシャベリとなり始終戀愛的の言葉をもらすもの多く男子は陰性にして女子は陽性なり今全院に於ける患者の職業別を擧ぐれば左の如しと

學生(男女)	九〇	官吏、公吏	三九
教師、傳道師	一五	農	三一五
會社員	二七	吳服、木綿商	二七
醫師	二一	飲食店、旅人宿	三〇
技手	二一	雜物、唐物商	二七
僧侶、神官	一五	酒、醬油、味噌製造	三九
軍人	六	菓子	一八
商工	三三	藝妓、待合、貸座敷	二一
辯護士	三	質屋	一八
雜	三〇	金貸	三
無職	三三	煙草商	一八
音樂	一四	土工、職工、左官、大工其他	四六

右は男女の合計を擧げたるものなるが尚其一斑を知るべし而して女子は自宅療養多くして男子は入院するもの多し若し女子をして男子の如く入院せしむるに於ては蓋し女子の方多かんと思ふ日本の風習として一體に女子を輕視したるはまことに慨はしき事なり云々と

◎皇后陛下の御慰問　本月十八日澁谷なる傷病者を御慰問あらせられ何れも有難き御錠を賜り感泣措く能はざりしといふ御仁慈の程こそ有り難けれ

▲兩皇孫殿下の御養育　（日本婦人の遠山女史の記事を一寸と拔萃して）川村一家にては此重任を全ふせんか爲めに三個の條件を編成せられたりと其一は御運動を多くすること御居室の空氣を新鮮ならしめ寒暑を防がん爲め夏冬の二季には御轉地遊はさるゝことあり第二の條件としては衛生に充分重を置かるゝこと第三の條件としては人乳を以て御養育の事と定められ完全なる乳母をして乳哺の御用を承はらしめたりとされど迪宮殿下には翌年二月頃より淳宮殿下は同じく五月頃より斷然人乳を廢し賜ひぬと承る

▲御召物　皇室の御規定は麗はしき模様を縫へる御

振袖に限られしも御養育主任は此御規定よりも寧ろ衛生に適ひた御服を差上ぐるを可なりとして先例を廢してフランネル、キメリニス、白金巾及び極めて軟かき晒木綿とし又御寝服は必ず白金巾フランネルと定められしよしコハ白服の清らかにして御健康の爲め尤も大切なるものなればなり御幼時は重もに日本服を差上げられしも御運動の際御便宜の上より昨年頃より御洋服に改められたり是は各國宮庭の御風習等を參照せられて水兵の服を召させらるゝよし其地質は重に夏はピケ、麻、リンネル、冬は絹羅紗の如きものを用ゐさせ給ふといふ

▲御食事　尤も大切なるものなれば侍醫は注意に注意を加へ淡泊なるものを主となし肉類の如きはまだ獣肉を用ゐられずして魚肉の新鮮なるを撰び牛乳は一日五百グラム乃至六百グラムにて其他はパン飯等にて副食物には野菜をも差し上げらるゝといふ

▲御獻立　兩殿下に差上ぐる御食事は日々左の御獻立により調製も多少日々の調理法を變更せらるゝなりと

迪宮殿下御食事

甲
- 朝　ジャム附パン、御牛乳二〇〇、御菓子
- 昼　ノース附魚、パンスープ、ジャガ芋、林檎
- 御八ツ　御牛乳一五〇、御菓子
- 夕　煮魚、御飯、ハンペン吸物、トウガン

乙
- 朝　ジャム附パン、御牛乳二〇〇、御菓子
- 昼　テリヤキ、豆腐吸物、カブラ（大根）西洋梨
- 御八ツ　御牛乳一五〇、御菓子
- 夕　アンカケ魚、パン、スープ、八ツ頭、（サツマ芋）

丙
- 朝　ジャム附パン、御牛乳二〇〇、御菓子
- 昼　コヽイ、パンスープ、[illegible]、エンドウ、林檎
- 御八ツ　御牛乳一五〇、御菓子
- 夕　煮魚、御飯、豌豆キントン（[illegible]吸物）

丁
- 朝　ジャム附パン、御牛乳二〇〇、御菓子
- 昼　茶碗蒸、パンスープ、百合煮、西洋梨
- 御八ツ　御牛乳一五〇、御菓子
- 夕　テリ焼、御飯、ハンペン汁、ツンボ

御菓子、[illegible]

從來の外、カステーラ、ビスクイー…

御牛乳は從來の通り一日五百五十瓦

淳宮殿下御食事（改正十月六日より）

甲
- 朝　ジャム附パン、御牛乳二〇〇、御菓子
- 昼　煮魚、パン、スープ、百合、御牛乳一五〇、水菓子少々ツヽ、
- 御八ツ　御牛乳一五〇、御菓子
- 夕　煮魚、御飯、ハンペン入吸物、豌豆キントン、御牛乳一五〇、御菓子

乙
- 朝　ジャム附パン、御牛乳二〇〇、御菓子
- 昼　テリ焼、御飯、豆腐吸物、御牛乳一五〇、御菓子
- 御八ツ　御牛乳一五〇、御菓子
- 夕　アンカケ魚、パン、スープ、八ツ頭芋、御牛乳一五〇、御菓子

丙
シャム附パン、御牛乳二〇〇、御菓子
煮魚、パン、スープ、百合、御牛乳一五〇、〇、御菓子
御牛乳一五〇、〇、御菓子
煮魚、御飯、腕元キントン、軟吸物、御牛乳一五〇、〇、御菓子

丁
シャム附パン、御牛乳二〇〇、〇、御菓子、
茶碗蒸、パン、スープ、ジャガ芋、御牛乳一五〇、〇、御菓子、
御牛乳一五〇、〇、御菓子
煮魚、御飯、鯛ウシオ、御牛乳一五〇、〇、御菓子

水菓子、林檎、西洋梨
御菓子、羊カン、ビスクイ、センベイ、カステラ

▲両殿下の御日課　朝は大抵六時前後に御起床となり七時には御食事十時半に御食事十二時より二時迄御寝二時は御八ツ午後五時に御入浴遊ばされ五時半夕御飯を召し上がられ其間は出來得る限り庭園を御運動遊ばさるゝにありといふ

▲爪の切り方　從來日本にては手足の爪の切りかたは丸く切り取るを例とすれども斯くては足の拇指の如きは靴を穿く際兩端の尖角指の肉に食ひ込み動もすれば其局所より破傷風等の恐るべき病毒を吸收するの危險なしと限らざれば丸く切り取らず爪の兩角を角になし置きて此等の害を防ぎ靴の如きも指先きの細きは足部の發育を礙するものなれば足の形ちと同じものを調製せしめて用ゐ居らるゝといふ

▲おむつ　俗に申す「御シメ」は同家にて各國の風俗習慣等に鑑み其尤も適切なるものと取りて製作せられたるものなりと其法甲は巾三寸縦八寸乙は巾八寸四方白木綿丙は二尺四方の舶來の織物（非常に水を吸收す）右のおシメを使用する場合には先づ丙の布を三角形になる様二ッに折り其上に乙其上に甲の布片を組み合せ之を後ろより臀にあて三角形の兩端を前にて合せ其前なる尖端は股間を通して上部に折り安全ピンにて止め併して又「サルマタ」樣のものを着用するにありといふ

▲有効黴菌　黴菌には有効有害とありますが酒、味噌、醬油、酢、納豆などは只専業者の造るものと思はるゝも是れは元來有効黴菌の然らしむる處で

▲有害黴菌　とは諸種の病源の元とある尤も恐ろしきもので是れが豫防は家内家外の消毒清潔法にあるので天日に曝らす事と消毒藥蒸氣力を用ゐることゝ等で豫防が出來るので總て黴菌は日光を恐れ暗い處

を撰ぶものであるから
▲臺所　などは家庭に於て尤も注意すべき場所でいろ／＼の黴菌の出來る巣窟で八百屋魚屋などの品物は有害黴菌の媒介所です八百屋魚屋などは衛生などには頓着しませんから水道よりは井水の方が清潔だといふ樣な迷信を持つて居るものが多くありますから中々油斷はなりませぬ

▲紡績會社の女工　の病氣は先づ第一に呼吸器病之は工場内の綿屑や塵埃を吸ひ込むからであるが次は眼病關節病皮膚病泌尿及生殖器病血行器寒冒などが其重もなるもので皮膚病などは其の害も惡いからで此外傳染病などは一人發生すると爲めに大なる蔓延を來す恐れがあるから工場衛生は充分の設備改良を要すべきことである

▲戰地よりの書信に　曰く　病といふものはたしかに一面は氣の持ち方でよくもなればわるくもなる戰地に來てからは平生の持病どこへやら氣の持ち樣も又大に關係することを覺ゆと

又曰く平生力一杯と思ひしものも戰地に來て見れば其力一杯でなきことを知り平生の數層倍の事が出來る是によりて見ても人は平生骨惜しみすることが知れると

▲井口あぐり氏　貴婦人が體格をよくしやうと思はるゝならば平生の注意が緊要です第一自分の身廻りの事を自分でして自然の運動を採り：：貴婦人が働くよが賤しいと思はるゝならば自分一人で運動する方法を考へるだけの勇氣を持つことが必要ですテニスなどをすることが唯一の運動ではありません眞に運動する氣ならば疊一疊敷の上で自分だけで十分に運動する事が出來ますから毎日一定の時間と規律とを守ッて行なつたならば身體を壯健にならしむる上に就てどの位ひ有益でありましやうか體操は學校の専賣ではありませんとは至言至言

▲齒牙の衛生　大森京都府知事は本年徵兵壯丁に就き其齒牙を驗せしに最小郡にても百人中四十人を下らず京都市の如きは實に百人中七十人の多きに及べ

るを慨し畢竟幼年期より齒牙の保護充分ならざるが爲め遂に終に一生醫すべからざる病根を遺すものにして前途憂慮に堪へざるものとなし幼稚園及小學校の當事者は深く意を茲に用ゐ齒牙の清潔法及甘味食物の制限等に就き有効なる方法を勵行して幼時より齒牙衛生を重んずるの習性を得せしむることに努めんことを訓令されしといふ

▲狂犬病の發生　神戸市兵庫なる西島某(七年)は本年九月三十日自家飼養の畜犬に咬まれ其犬は操狂狀を呈して十月一日斃死し某は去月四日に至り恐水病を發して同五日死亡せしかば同市にては畜犬取締規則を勵行し野犬撲殺に從事せしかば其後傳播の模樣なしといふ

▲防腐劑の簡便試驗法　防腐劑含有飲食物の簡便試驗法なりとて京都醫科大學の松下博士の語りし處なりといふを聞くに左の如し

防腐劑を酒に用ふるものは酒にして其種類少からずと雖も現に多く使用せらるゝはサリチル酸、ホルマリン、弗水等なるが如し依て今此三種に就き簡便試驗法を示すに先ち此三種の藥劑が如何に人體に有害なるかを簡單に示すの要あり

▲サリチル酸　制規の分量なれば敢て有害といふにあらざるも若し制規以上のを含むものを口にするときは頭痛く耳鳴り又は胃腸加答兒を起して嘔氣を催し或は血液の循環を放逆ならしめ其結果腎臓炎を來し尿に血を交へしむることあり

▲ホルマリン　凡て蛋白質の消化力を半減し直接に胃腸を害し間接には慢性中毒の結果腎臓病を惹起することあり

▲弗水　腸胃加答兒を起し消化を妨げ嘔氣を催すことサリチル酸と異らず且つ齒も損傷とし〳〵は腸を潰瘍せしめて涎を流し口中臭氣を帶ぶ其甚しきに至れば腎臓炎を併發して尿頻數を來す右三種の簡便試驗法は左の如し

▲サリチル酸　制限以上の分量を含有するものは鹽化鐵液一二滴を盃半分程の酒に加ふれば紫色又黒色を呈す

▲ホルマリン　フロログルシン千倍の水溶液を盃五分の一位の酒に四五滴を加へ更に苛性加里溶液五六滴を點ずれば紅色又は赤色を呈す

▲弗水　含有酒には過度加里一二滴を加ふれば赤色若くは黄色を呈す然れども若し分量多過ぎれば直に溶解して無色となるを以て能く注意せざれば反應を見逃す虞あり若し安全なる試驗法を採らんとして暇を惜まぬならば硫化安母尼亞一二滴を加ふるに若かず左すれば黒色の反應を呈す

（注意）盃は普通の小形のものにて可なるも玻璃コップなれば識別し易し又酒は冷酒よりも暖酒の方反應を迅速ならしむ

▲戰爭と出產兒　我國にて年々出產する小兒の比例

は男兒六分、女兒四分の割合なりしが此程醫科大學産婆會に於て醫科大學産科にて調査せるもの及び同所出身産婆よりの諸報告を綜合したる所によれば本年の出産は男兒七分女兒三分の割合にして明年は男八分女二分の割にて出産するならんとの説なり而して戰爭のある前年は不思議に女兒の出産多く昨年の比例は例年の反比例に男四女六の割合なりし日清戰爭のありし前年も女兒の出産多かりしと之に依つて見れば多少婦人の胎内にある兒は姙婦の感應の如何に依つて變化のあるものなるべし

▲少女の春潮期　東北醫會々員某氏は去卅三年以來奥羽婦女の春潮期を調査せられたる結果は左の如くにして我國少女の平均成熟期に比して別に氣候的關係の特徴を認めざるは更に攻究を要すべしとなり

宮城縣	四十五人の平均	十五年一ヶ月十一日
福島縣	三十三人の同	十五年〇月十三日
岩手縣	四十六人の同	十五年二ヶ月十六日
青森縣	二十九人の同	十四年十ヶ月廿五日
秋田縣	四十七人の同	十四年十ヶ月九日
山形縣	二十五人の同	十四年十一ヶ月八日
總計	二百人　平均	十五年〇月八日

▲上流社會と花柳病　上流社界に花柳病に罹り居る者多きは更に夥しき程にて此等現樣の良人は多く銀行會社員等なりと蓋し會社員は常に花柳病に立交りて交際なさる所以ならんが注意すべき現象なりと或醫師は語られしと

▲布哇のトラホーム　布哇ホノルヽ市に於ける學齢兒童間にトラホーム流行し六十名の患者を發生するに至りたるを以て同地衞生局長代理クーバ氏は客月二十八日檢事總長アンドリウ氏文部主事アチキンソン氏其他衞生局部内の役員を集合して臨時會議を開き刻下の應急處分に關し討議する所あり結局一名の醫師を雇傭し一般學童の眼疾檢査を執行する事となれり依りて今後本邦より渡來する移民に對する眼疾檢査は自然一層の嚴密を加ふるならんと云ふ

▲博士ロベルト、コッホ　コッホ博士は本年の冬期

中亞弗利加に旅行し黴菌學に就て研究する處あるべしと尙ほ氏は家畜黴菌の傳播は扁虱の媒介に因れることを認め最も此の點に就て究むる由なれば其が研究の結果は大に獸醫學上に益を與ふべし

大日本婦人衛生會記事

十二月例會

本月三日午後一時半より神田區一ツ橋通共立女子職業學校内に於て例會を開く第一席醫學博士遠山椿吉君には「家庭と黴菌」といへる演題にて黴菌を三種に分ち第一無害第二有効第三有害とし各明瞭に實例を擧げて講話せられ第二席陸軍步兵中佐堀内文次郎君には「出征軍隊の防寒被服及地理に就て」と題し英米露等の外套頭巾手袋靴靴下など五十種程携帶の上現時滿州に於ける寒威に付防寒具の必要等を講演せられたるも時針四時四十分に至り此に閉會せり此日出席の役員には鳩山春子、田村きよ子、羽田三緒子、高木鎭子、三浦敎子、緒方愷子、石川定子の諸氏(出席順)なりし

* * * * *

◉本會講師晩餐會

去月十九日午後五時より麴町區富見町富士見軒に於て昨年以來本會の爲め講話せられたる講師諸氏を招待して晩餐を開きたり席定まるや鍋島會長の謝辭三宅博士の挨拶あり晩餐終りてよりは別室に於て懇談に時を移し何れも歡を盡して散會せしが當日の出席者は左の如し

出席いろは順

醫學士橋本左武郎、堀内中佐、醫學博士土肥慶藏、一等軍醫正醫學士能勢靜太、醫學博士栗本東明、警察醫長醫學士栗本庸勝、醫學士山根正次ドクトル松山陽太郎、醫學博士朝倉文三、醫學博士三宅秀の諸氏及役員には鍋島會長濱尾副會長鳩山、高木かう子、三浦敎子、山本多穗子、羽田三緒子、岡田德子、田村さ代子、宮本樂子、

高橋孝子、石川貞子、増田捨子、岸澄子の諸氏なりき



●本會帽子寄送の事を諸姉に圖るや先づ寄附せられたるは左の如し

傷病者帽子寄附

一金參圓五拾錢拾個分　甲府市横近習町一丁目　川上きん子
一金壹圓　深川區冬木町十　三森千枝子
一金五拾錢　鹿兒島縣加治木村　松木友代子
一金壹圓　麴町區飯田町六丁目　増田せい子
一金壹圓　小石川區林町　濱欽子
一帽子五個　宮城縣角田町　湯村きく子
一帽子拾個　小石川區金富町三十三番地　濱尾作子
一仝拾個　小石川區音羽町七丁目十番地　鳩山春子
一仝拾個　麴町區内幸町一丁目三番地　高木鐐子
一仝拾個　麴町區三番町三十六番地　岡田德子
一仝拾個　赤坂區表町四丁目四番地　松平芳子
一仝拾個　麴町區下二番町　山本多穂子
一仝參個　日本橋區本町二丁目十二番地　高橋孝子

高崎支會報告

第廿七次例會

十一月六日（日曜日）例會を高崎高等小學校内に開く午後一時開會第一席講師關亀齢君には前會に續き「解剖學の大意」と云へる演題にて四肢骨格を示され該部の靱帶及筋の關係等を詳説せられ第二席には講師乾宗太郎君「狂犬病の實驗に就て」と題し該病一般の病狀を實驗したる患者に就き詳細説示せられたり第三席には講師小林春造君「鉛筆の眼疾に就て」と題し色鉛筆の有害なることを説き即ち結膜角膜に潰瘍を起し續て全眼球に炎を起し失明することより又動物試驗の成績等を詳述し該毒の恐るべき注意を懇に述べられたり第四席講師津久井省己君には「結核に就て」と題し該病一般傳染の經路病狀並に黴菌の發育狀態を詳述せられたり閉會せしは午後四時頃なりしと

出席講師　乾宗太郎君　津久井省己君
小林春造君　關亀齢君　藤崎清太郎君

役員には　相澤、齋藤、相川、星野の四氏なりき

山形支會報告

十一月例會

十一月十二日午後二時より山形市なる女子師範學校内に例會を開く會員來會者傍聽生共約八十名稲田、鵜科、北島の諸氏出席せられ左の有益なる講話ありて四時散會せり

一眼の衛生(前回の續)　稲田醫學士

一小兒養育法に就て　鵜科醫學士

米澤支會報告

十一月例會

十一月十三日第二日曜日例時より松岬公園内松岬館に於て開會左の講話ありて午後四時散會せり出席講師は左の如し

一家庭看護法繃帶の實習　中條梅節君

一近視眼の話　加藤慶三郎君

一齒の衛生に就て　關新太郎君

はみがきの用法

右の外

宮崎、猪股の兩氏は繃帶の實習をなせり

茨城支會報告

十一月例會

十一月二十七日婦人衛生會茨城支會は豫記の如く午後一時より水戸市高等女學校内にて開かれ又其順序は左の如しと

一開會の辭　鈴木幹事

二齒の衛生

三催眠術の事に付幷に實驗　醫士秋元贊助員

四複音唱歌、風琴　會員牛尼氏

ヒレフル山、老松、

女學校補習科生二十名

小田幹事

大森會員

五、休憩　六、文書朗讀

斯くて出席者中抽籤によりて席上を周旋し且時局に對する行動等を相談して全く閉會を告げしは午後四時三十分にして出席者四十餘名にて當日三名の入會者ありしと云ふ



●本會入會者

○相州　吉野仲子紹介

●清國上海文路四十號　通常會員　深野英子

○事務所申込

●大阪市北區宗是町四十二　通常會員　藤村章子

○高知　野並三仲子紹介

●高知市金子橋長曾我部氏方　通常會員　遠藤豐子

○長野　鈴木乙五郎君紹介

●長野縣更級郡西寺尾村　通常會員　五明はや子

○藤波ふじ子紹介

●高崎支會入會者

●高崎市宮元町九十二番地　通常會員　赤塚まよ子

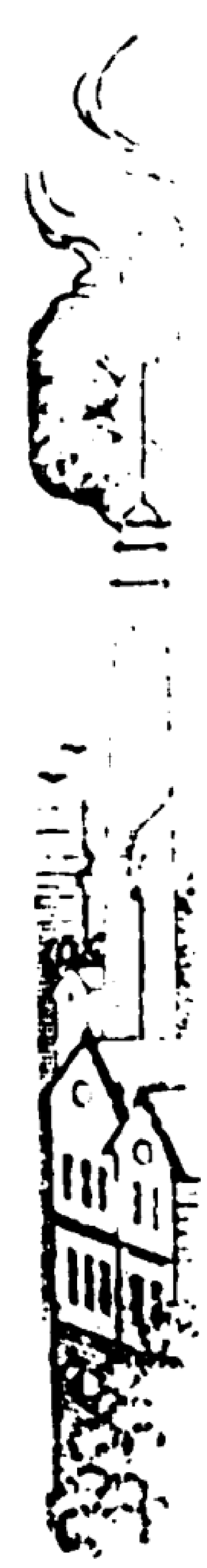
○三橋ひろ子紹介

●高崎市赤坂町四十八番地　通常會員　大塚まさ子

●山形支會入會者

●山形市　特別會員　古関こと子

●仝　特別會員　蓼科なみ子



●轉居

▲會員諸姉御轉居の際は可成新舊兩所御記入事務所宛御一報相願候

●小石川區竹早町三十七地內へ　村山ふく子

●香川縣丸龜市本町看護婦養成所へ　桑名まき子

●名護屋下前津町二二七へ　安田定子

●長野市高等女學校寄宿舍へ　黒岩てい子

●麹町區上六番町四十七へ　山口雪子

●相州平塚停車場前へ　村井たか子

●臺北小南門街四丁目四番戸へ　田中直子

●牛込區市ヶ谷仲ノ町三十九、比留氏方へ　竹上はる子

●廣島縣宇品碇泊土洋丸第七臨時救護班へ　塙とせ子

●廣島市尾道町四川病院內へ　林久滿子

●交換寄贈雜誌（十一月分）

●日本赤十字　京橋區築地二ノ二十一　日本赤十字發行所
●統計集誌　京橋區山城町六　東京統計協會
●をんな　麹町區下二番町二十七　大日本女學會
●大阪醫學會雜誌　大阪市東區淡路町一ノ六　大阪醫學會
●通俗衛生　大阪西區土佐堀通一ノ元　大阪私立衛生會
●大日本婦人教育會雜誌　赤坂區表町二ノ十三　大日本婦人教育會
●國家醫學會雜誌　本郷區富士町一　國家醫學會雜誌發行所
●婦人世界　大阪南區鰻町通四ノ七　浩華婦人會
●產科婦人科學雜誌　日本橋區濱町三ノ七　產科婦人科學會
●婦女新聞　牛込區東五軒町四十一　婦女新聞社
●愛國婦人　麹町區飯田町一丁目　愛國婦人發行所
●藥石新聞　大阪西區江戸堀下通一ノ六　藥石新報社
●工手の母　大阪北區西野田新家四ノ町　工手の母新報社
●草樂新聞　大阪南區心齋橋筋二丁目　草樂新聞社
●日本衛生週報　甲府市佐渡町十五　日本衛生週報社
●家庭新聞　熊本市北新坪井町三　家庭新聞社
●兒童教育　神田區末廣町十　兒童新聞社
●日本婦人　府下澁谷村字常磐松御料地內　帝國婦人協會
●衛生報知　神戸市相生町一ノ廿七　私立神戸市衛生會
●京濱實業新報　神田區北神保町八　京濱實業新聞社
●東京藥事新報　京橋區柳町四　東京藥事新報社
●東京教育雜誌　神田區錦町一ノ二十　東京教育雜誌發行所
●大日本私立衛生會雜誌　京橋區宗十郎町七　大日本私立衛生會
●婦人新報　赤坂區榎坂町五　婦人新報社
●產婆學雜誌　日本橋區濱町三ノ七　日本產婆學協會
●廣島衛生醫事月報　廣島市猫屋町　廣島衛生醫事月報社
●越佐教育雜誌　新潟縣市日仲通一番町　越佐教育雜誌社

●婦人と子ども　本郷區女子高等師範學校　フレーベル會
●神經學雜誌　小石川區駕籠町　日本神經學會
●新潟縣衛生會雜誌　新潟縣廳內　新潟縣衛生會
●婦人　神戸市三ノ宮町一丁目　婦人協會
●福田會月報　麻布區笄町百三　福田會育兒院
●牟婁新報　和歌山縣西牟婁郡田邊町　牟婁新報社
●佛教婦人　東京巣鴨　家庭社編輯部
●學校新聞　福井縣福井市毛矢町　學校新聞社
●家庭雜誌　麹町區六番町十　由分社
●藥業新聞　福井市佐佳枝上町　藥業新報社
●藥業公論　豐多摩郡內藤新宿北裏町　藥業公論社
●東京市教育會雜誌　東京市役所內　東京市教育會
●日本女學生　本郷區東片町百三十三　日本女學生會
●日本實業新報　武州入間郡川越町大字松郷　日本實業新報社
●割烹新聞　下谷區上根岸町百十七　家庭割烹實習會
●家庭の友　本郷區西片町十　內外出版協會
●藥學雜誌　牛込區下宮比町八　日本藥學會
●北海實業新報　北海道札幌區北條東三丁目　北海實業新報社
●萬問答誌　茨城縣筑波郡板橋村　萬問答社
●體育　府下大井村字北濱川　日本體育會
●經濟新報　麹町區永田町二ノ二十　經濟新報編輯部
●英學生　小石川區小日向臺町三丁目　東內社
●あかつき　埼玉縣埼玉郡越ヶ谷町　曉社
●ひじり懸門資論　愛知縣岡崎町　淡善堂發行所

私立大日本婦人衛生會 茨城支會規則

開設の趣旨及目的　凡人生の幸福を保持するには完全なる教育を認まざる可からず 之を望んとするには必ず衛生と相俟ちて而る後ち始めて全き事を得るならん。されば吾人は現今東京に於る該本部に擬して更に茨城支會を開設し吾人が日常實行する衛生の事項をなして益研究し益改善を圖りて其の發達を互に努め力めんとするに在る而已●本會は弘立大日本婦人衛生會茨城支會として之を當水戸市に置く●本支會々員たる事を望む婦人は何人にても入會することを得●入會手續入會の節は氏名族籍住所等を明記し本支會事務所に申込むものとす。但し會員證は東京本部へ通知し然るのち之を交附すと雖とも徴收代は豫め前納せらるべし●會員種類會員を分ちて特別。通常。終身の三種とす 終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三十錢以上通常會員は一ヶ月拾五錢を納むると●男子にして本支會の趣旨を賛成する者は之を賛成員とす●本支會員は本部にて毎月發刊する雜誌を無料にて受くることを得●退會せんとするものは其旨本支會事務所に報知すべし。(死亡等は親戚知人より通知せらるべし)●本支會に左の役員を置く支會長一名、副支會長、幹事六名、評議員十名、書記、會計、庶務は幹事中より各二名づゝ互撰分擔す●役員は任期滿一ヶ年とし毎年五月總會に於て投票を以て之を定む●集會は例會總會評議員會及臨時會とす集會八月を除く外毎月一回第三の日曜日に之を開く總會は月適宜の日を以て之を開く急要の件あるときは臨時會若くは評議員會を開きて評議する事あるべし●集會學識經驗ある知名の士に囑托して衛生上の講話演説又は之に關したる實驗等をも爲し本支會員に聽講せしむ但會員は知人家族等誘引して來會することを得(此際出席の衣服は總て質素たるべし)●會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は會費を滯納するものある時は本支會長評議會の決議を經て除名する事あるべし●茲に記述したる數項の他その必要と認むべき事項あらば成る可く本部規則を適用するものとす

明治三十四年十月創立　水戸市上市田見小路二十五番地　茨城支會

私立大日本婦人衛生會 高崎支會規則（明治三十五年四月創立）

●第一條 當支會は大日本婦人衛生會に屬し汎く婦人をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ随て社會全般の幸福を増進するを目的とす●第二條 當支會は大日本婦人衛生會高崎支會と稱し事務所を高崎市寄居町五十番地に置く●第三條 當支會は高崎地方在住の本會々員と支會限りの支會員とを以て組織す●第四條 本會又は支會の會員たらんとする者は住所姓名及び會員の種類を詳記し三個月分以上の會費を添へ申込まるべし●第五條 當支會に學術其の他の補益を與へらるゝ人士を推して講師又は篤志賛助員となす●第六條 當會員にして轉居死亡又は退會の時は速に其旨事務所に通報せらるべし●第七條 支會に左の役員を置く會長一名副會長一名幹事六名評議員十二名●第八條 役員は會員中より公撰し會長副會長は役員中より互撰す又幹事評議員は役員中より會長之を指名す但役員の任期を一箇年とし再撰するを得●第九條 本會の特別賛成員を定員外の評議員とす●第十條 當支會は毎月一回講話會を開き毎年一回總會を開くものとす總會に於ては講話の外役員の改撰會務の報告等をなす●第十一條 會員及賛成員の家族並に篤志賛成員は集會に參列するを得但時宜により男子の參列は謝絶することあるべし●第十二條 本會々員は本會費の外別に支會費を要せず支會限りの會員は支會費として一箇月金五錢を出す者とす●第十三條 總て會費の徴收は集會の席上に於てするを例とす但三箇月分以上宛前納すべし●第十四條 支會の所有金は支會の名義を以て銀行に預け置くものとす●第十五條 會員又は會員外より金員物品の寄附ある時は之を受納す●第十六條 本會所有の金員物品を慈善事業等に使用せんとするときは衆議に諮るものとす●第十七條 會員は服裝其他を質素にし且會の節は時間等を確實に履行すべし●第十八條特に、此規則に掲げざる者は本會の規則を準用す

●事務所　高崎市寄合町五十番地　高崎支會

私立大日本婦人衛生會米澤支會規則

第一條 當會ハ私立大日本婦人衛生會米澤支會ト稱シ衛生上ノ研究ヲ目的トシ互ニ智識ヲ交換シ社會ノ幸福ヲ增進スルニアリ

第二條 支會事務所ハ當時假ニ當時免許町一三六九番地猪股方ニ置ク

第三條 當支會ニ會長一名副會長一名幹事五名ヲ置ク其任期ハ各一年トス

第四條 每月一回（第二日曜午後一時ヨリ四時迄）講話會ヲ開キ每年五月總會ヲナシ役員改撰庶務會計等ノ報告ヲナス

第五條 入會ハ會員ノ紹介ヲ經テ宿所姓名ニ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込又退會セントスル者ハ其旨事務所ニ屆出ヘシ

但シ已納ノ會費ハ返附セス

第六條 當支會ノ會費ハ左ノ三種トシテ特別會員每月金參拾錢通常會員甲每月金拾五錢乙每月金五錢前納スルモノトス

但會費拾五錢以上納ムル者ニハ本會雜誌ヲ配附ス

第七條 會費ハ雜誌料トシテ本會ヘ納メ一部ハ支會經費ニ充テ殘餘ハ銀行ヘ貯蓄シテ支會事業ノ資金トナス

第八條 會員及員外篤志者ヨリ金品ノ寄附アル時ハ役員協議ノ上特待員又ハ賛成員トナスヘシ

第九條 講話ノ節ハ汎ク婦人ノ傍聽ヲ許ス

第十條 支會々員ノ質素ヲ旨トシ集會ノ際ハ可成木綿服ヲ着用スルヿ

第十一條 特ニ支會則ニ揭ケサルモノハ本部ノ會則ヲ準用ス

事務所米澤市免許町一三六九

米澤支會

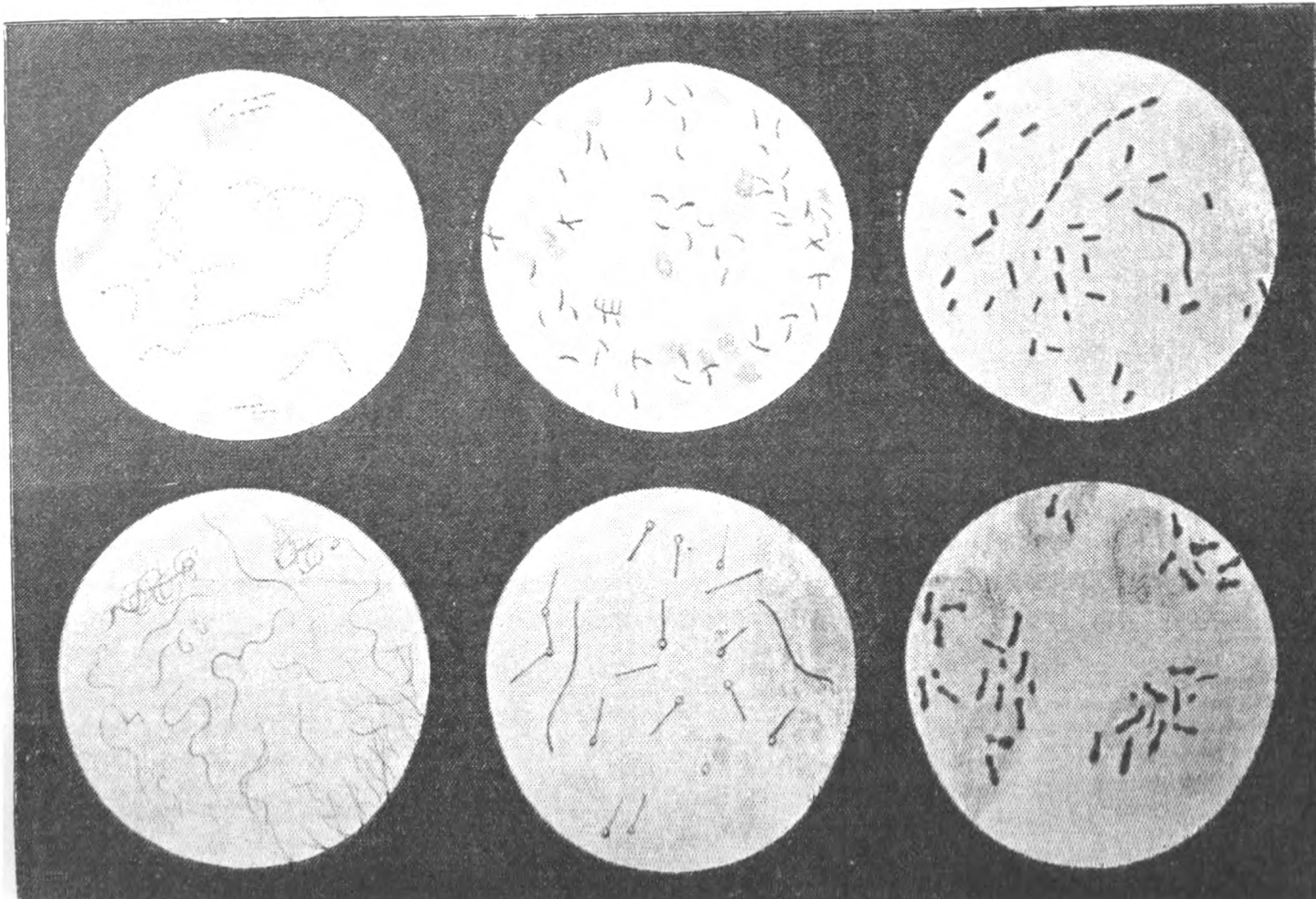
二月例會廣告

來二月四日第一土曜日午後正一時半より神田區一ッ橋通女子職業學校に於て本會の例會を開き左の講話あり萬障御繰合せ御知友御誘引御來會有之度候也　衣服は勤めて御質素に相願候

一糖尿病ニ就テ　醫學士　木村德衞君

一演題未定　醫學博士　岡田和一郎君

明治三十八年一月　私立大日本婦人衞生會



窒扶斯菌　結核菌　丹毒菌

インフルエンザ菌　破傷風菌　再歸熱菌

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

明治三十七年十二月十八日印刷及發行（毎月一回二十日發行）
婦人衛生雜誌第百八拾壹號

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會々員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ

第二條　會員章は本會幷に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は左の實價を以て會員に頒つ





●本會徽章料左の如し

●通常會員章
第三號　メッキ製拾二錢、送費六錢
●第二號　正銀製四拾錢、送費六錢

●終身及特別會員章
第一號　七十錢（黑㶚裄入送費九錢）
六十錢（桐裄入送費六錢）

●入會注意

●御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるべし付員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼れ會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收者差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料なども御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京麴町飯田橋通）宛振出あるべし又た價格表記通巡便、何にても差支なし●會費受領證か要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

●會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌進呈の事

廣告料　一頁五圓半頁其二分一以下同之　●特別廣告一頁拾圓半頁其二分一以下同之

本誌一部定價貳拾錢

東京市麴町區飯田町六丁目三番地
發行所　私立大日本婦人衛生會

東京牛込區矢來町三番地
編輯兼發行人　田中鶴三郎

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷人　渡邊智

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場印刷